

以上述べたる處の計算法の何れかを應用すれば當時妊娠第何箇月なるかを定むること又甚だ難しとせず然れども受胎の時日を知り得る場合は極めて少くして確に分娩の期日を定め難く其他最終月經により或は胎動を觸知したるによりて推算するの法も時として誤りに陥ることあるものなり故に此等の推算に基き猶前に述べたる子宮底の位置子宮の大き胎兒の大き殊に兒頭の大き硬さ子宮腔部の状態子宮壁の緊張の状態等に注意をなし能く斟酌して妊娠第何箇月なるや何時の頃分娩すべきやを告ぐべし然れども妊娠の持續を二百八十日と看做すことも多數の婦人に於て其平均を求めたるものなれば實際には多少の遲速を免れず故に到底確實なる時日を定むることを得ざれば只其何時の

頃分娩すべきことを告ぐるに止むるを宜しとす假令ば月經不順なりし人などに於ては最終月經のみによりて判断すれば誤りなしとは云ひ難し然れども月經順調なりし婦人なれば概ね之に據ることを得べし其外胎動を感ずることこの如きも妊婦によりて早きことあり遅きことあり故に子宮の大き胎兒の大き等によるを宜しとす然れども雙胎妊娠横位の妊娠羊水の過多なる場合等には注意せざれば過ちに陥ることあり且時として故意に月經受胎の時日を偽ることなしとも云ひ難きが故に充分注意して月經胎動受胎等の時日を問ひ内診外診等によりて子宮及胎兒に起れる變化の状態を確むることを要するなり妊娠各月に於ける變化殊に子宮及び胎兒に起る變化は既に之

を前に述べたれば之を参照すべし

第七十三節 妊婦の診察法

妊娠せる婦人を診察する方法を二つに分つ一を外診と云ひ一を内診といふ外診とは産婆が耳、目、手を用ゐて妊婦の全身の状態、乳房、腹部、骨盤、子宮、外陰部、下肢及胎児の状態を検するを云ひ内診とは手指を用ゐて骨盤内に於ける産道の模様及び胎児の状態を觸知するを云ふ
其他診察中機會を見て姓名、年齢、身分、近親及自己の健否、病ありば其状態、月經の状態、經産婦ならば既往の妊娠、分娩、産褥の經過及び今回の妊娠の經過等を尋問すべし
總べて妊婦を診察するには前に述べたる母兒兩方に起る種々

の變化をよく理會せざれば其診察して知り得たることも無益なり又熟練せざる間は其知り得る處甚だ確かならざることあれども注意して丁寧に診察をなすときは速に熟練するに至るものなり

診察に際しては秩序を守り、成るべく物柔かに丁寧なるべく、切りに長時間を要するは宜しからず又成るべく妊婦の身體を露出することを少くすべし

診察を受くるものには排尿して膀胱を空虚にせしむるを宜しとす時として妊婦又は産婦なご自ら排尿したりと云ふも猶膀胱内に尿の残留することあり直腸の充盈も亦診察を妨ぐることあり故に注意を忽にすべからず

第七十四節 外診法

目に依るものを視診、手によるものを觸診又は按診、耳に依るものを聽診と云ふ

先づ妊婦の骨格、筋肉等のよく發育し居るや否や、或は皮膚の血色の如何等によりて其強壯なるか、病弱なるかを、知り、猶同時に骨盤の有様等をも知ることを得べし、次には視診と按診とによりて乳房を検し、其形状、大さ、乳嘴の哺乳に適するや否や、乳頭には損傷等の變化なきや否や、乳腺は能く發育せるや否やを、確め、終りに之を搾り、初乳の出つるや否やを見るべし

腹部は先づ衣類を解きて、必要なる部分を露出せしめたる後、温

めたる兩手を徐かに腹部に貼し、視診と按診とを同時に行ふ之によりて腹部の形状及び緊張の度、合、臍窩の形状、白線の着色、妊娠線の有無、及び妊娠線の新舊、子宮の形状、大さ、硬軟、緊張の度、羊水の多少等を、檢し、猶注意して胎兒の大さ、及び其身體の部分を觸知し、以て胎位、胎向、胎勢を知り、併て胎動を檢すべし

此外診を行ふには、妊婦の側方に坐し、次に述ぶる處の四段の法に依るを宜しとす、若し然らずして、叨りに順序を誤るべきは、所見は不明瞭を免れずして、屢誤診に陥り、易きが故に、四段の法に依るのみならず、精密なる注意を以て之を診査すべし、第一段は第五十一圖及び第五十二圖に示すが如く、手指を並べて腹部の兩側に置き、徐に上方に向ひて接觸すべし、而して子

宮底の位置の何れの邊にあるやを定むべし之を定むるに
 は通常妊娠後半期に於ては臍窩或は胸骨の劍狀突起の尖端
 に依りて其中央或はその何れかを距ること何指横徑の上又
 は下に位す云ふ且同時に子宮底部には胎兒の頭部ある
 や臀部あるや小部分あるやを検すべし若し子宮底部空
 虚なるを認めなば第二段の方法によりて子宮の兩側に兒頭
 と臀部とを觸るゝや否やを検査すべし其外猶胎兒の大きに
 注意すべし

第二段にては心窩部に置きたる兩手は之を側腹部に移し以て
 徐かに胎兒の小部分と背とを觸知すべし小部分は屈曲せ
 る細き棒の如きものとして觸れ背部は弓狀に彎曲し一様な
 硬度を有する抗抵ある部分として觸る之に依りて兒背の

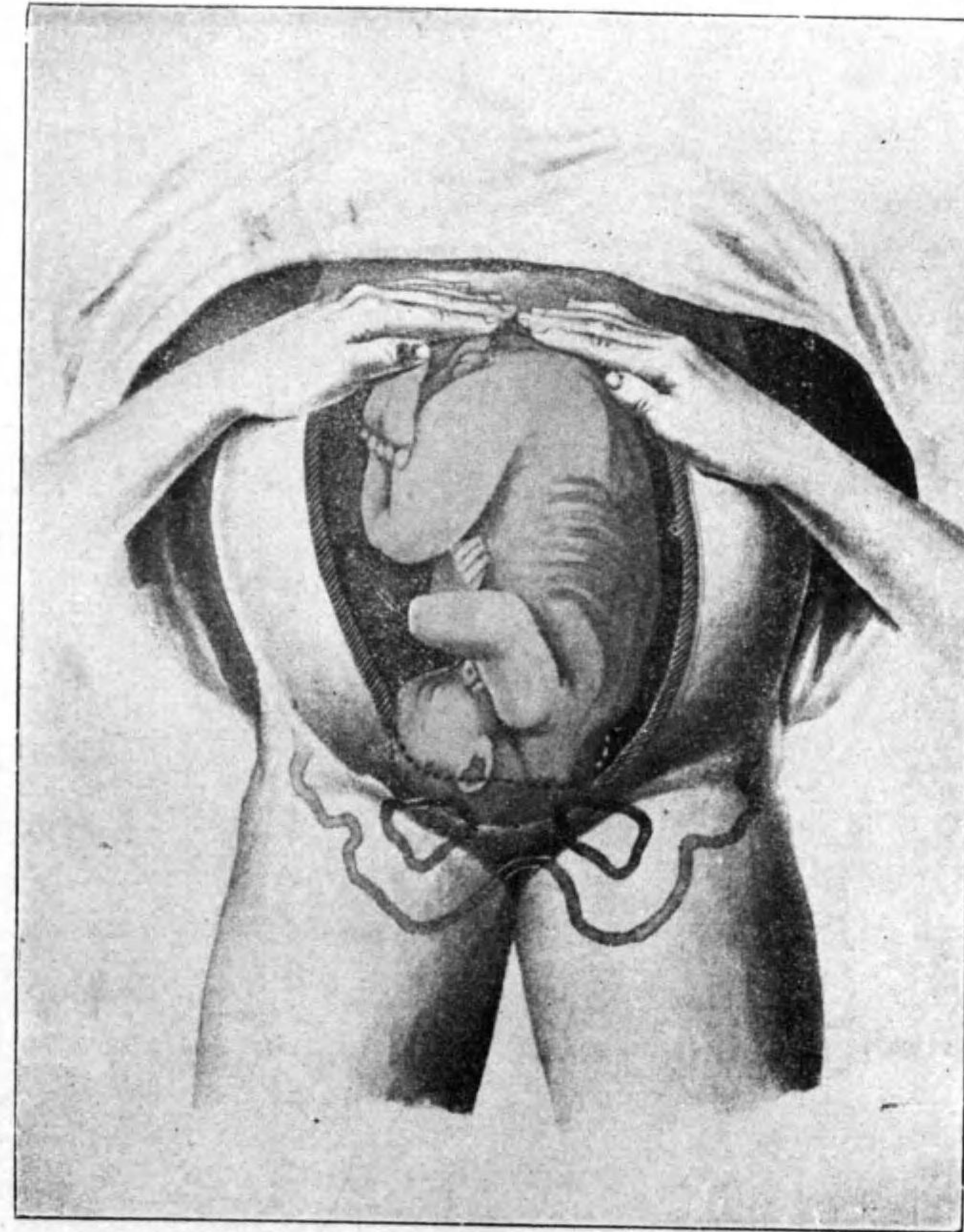
方向を知り胎兒の體向を定むることを得べく且第一段第二
 段の法によりて診察する間に子宮壁の緊張の度を注意すべ
 し(第五十三圖及第五十四圖)

第三段は第五十五圖及第五十六圖に示すが如く右手にても左
 手にても診察に便なる一方の手を用ゐる拇指と示指との間を
 充分に開き骨盤上口の上に於て胎兒の下向部を靜かに兩
 指の間に觸るべし若し頭部下向する時は一樣に硬く球狀
 をなせるものを觸る而して少しく兩指を横に動かす時は恰
 も水中に浮したるゴム球に觸るゝが如く一方より衝動を加
 ふれば他方に突當りて跳ね返る感覺(浮球の感)あり是兒頭猶
 骨盤内に籍入せざる徴なり若し既に骨盤内に入る時は浮球
 の感なく移動せず斯る場合には更に第四段の法にて精密に

検査すべし又不正なる形を有し軟かなる者に觸るゝ時は臀
 部なり若し頭部及臀部を通常よりも稍軟かに觸れ且其部分
 の子宮壁厚きが如くに認めたる時は子宮の下部に胎盤の
 附着せるものなることを推知することを得或は骨盤
 上口の上の部分空虚にして頭部も臀部も觸知せざる時は胎
 兒の頭部と臀部を子宮の兩側に求むべし頭部は一樣に
 硬き球にして輕き衝突を子宮に加ふれば浮球の如き感を與
 ふ臀部も亦此感を與ふることあるも頭部の如く著しからず
 此第三段の法は胎兒の下向部猶骨盤上口の上^{まへ}に在るや或
 は骨盤腔内^{くわうない}に入れるやを定むるものにて甚だ大切なる
 ものなり若し初妊婦の妊娠末期又は一般に分娩に際し胎兒
 下向部の多少骨盤内^{くわうない}に進^{しん}入^{にふ}せるが如き場合には第四段の法

欠

圖 一 十 五 第

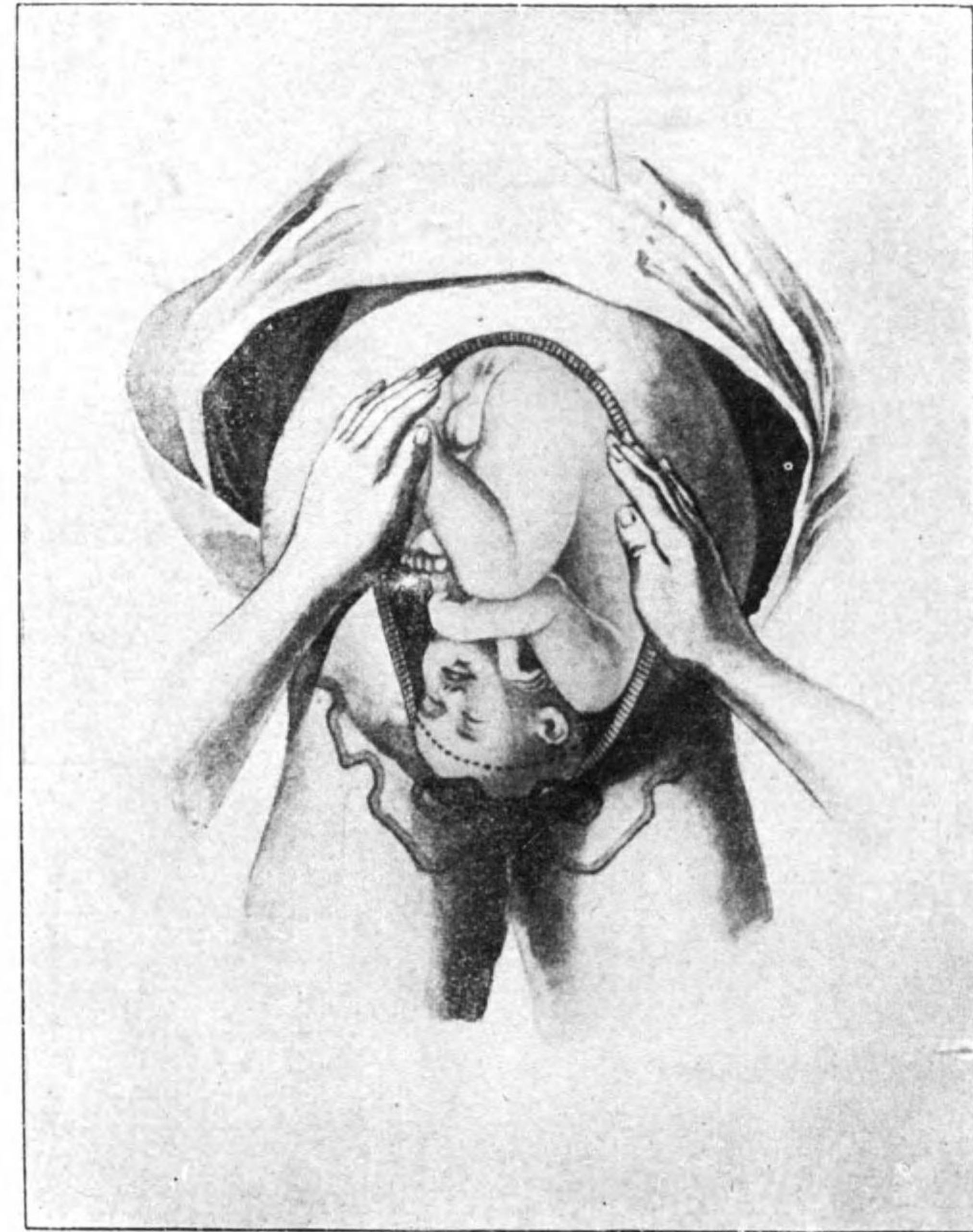


す 示 り よ 面 前 を 段 一 第 の 診 外

欠

欠

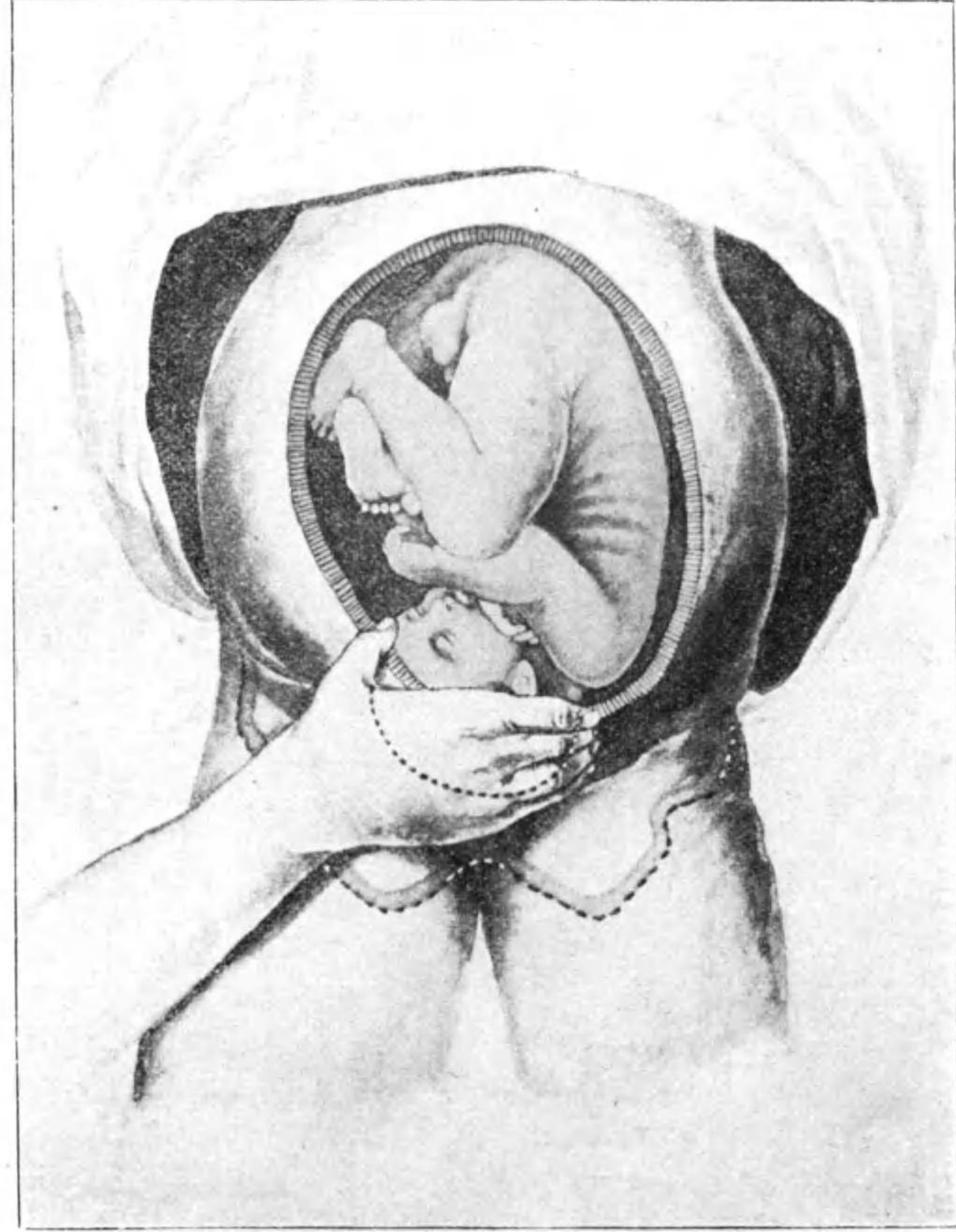
圖 三 十 五 第



す 示 り よ 面 前 を 段 二 第 の 診 外

欠

第五十五圖



外診の第三段を前面より示す

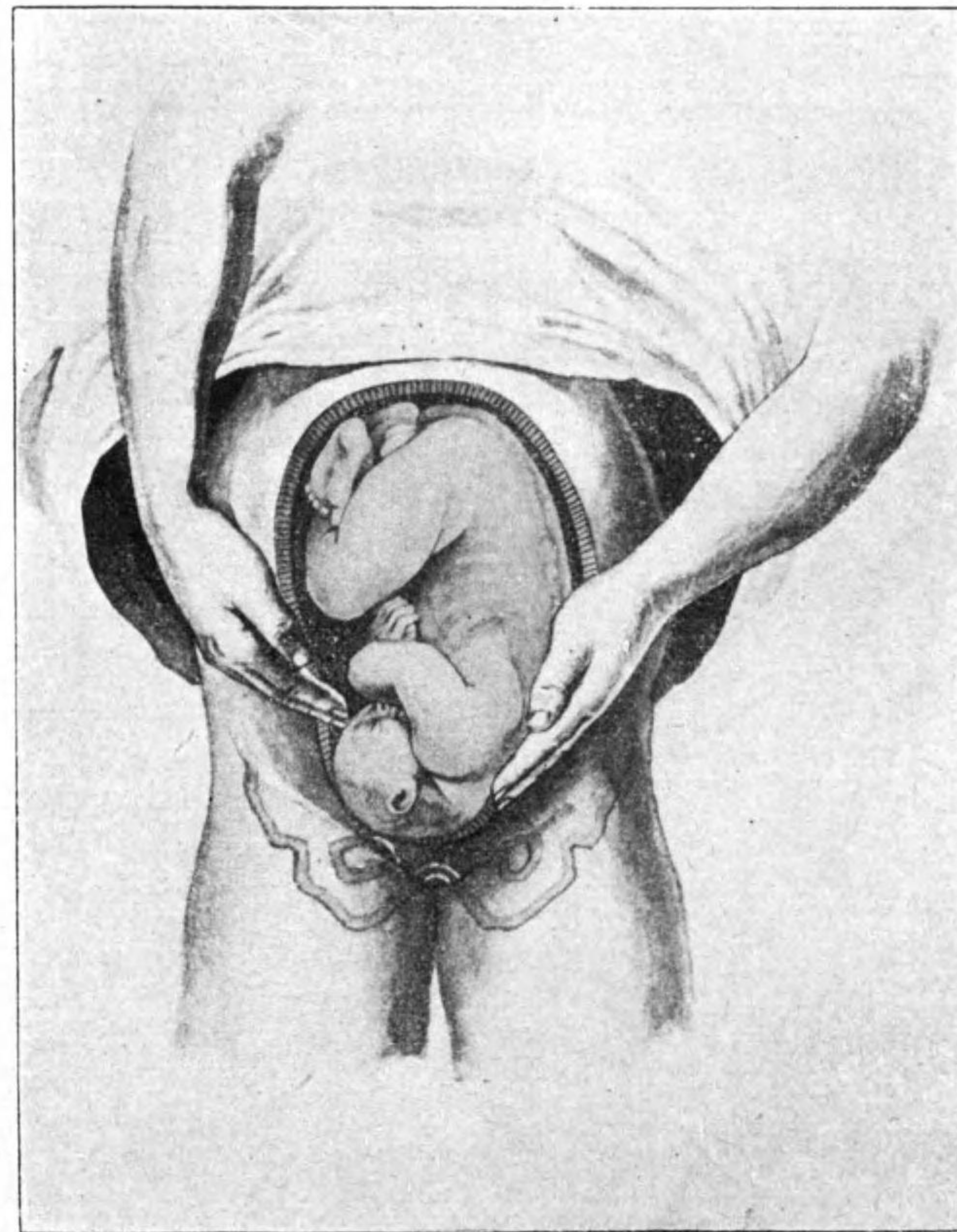
第五十六圖



外診の第三段を側面より示す

欠

圖 七 十 五 第



す 示 り よ 面 前 を 段 四 第 の 診 外

欠

に據るべし

第四段の法は産婆必ず其背を妊婦の顔面に向けて坐するを便なりとす先づ兩手指を伸し之を鼠蹊部に於て骨盤の兩側壁に沿て徐かに深く骨盤内に挿入すること第五十七圖及第十八圖に示すが如くなるべし頭部の下向せる時は硬き球状のもの骨盤内を充すを見るべし併し猶更に精密に之を診する時は額部は圓形を帯び頤部は母體の上方に向へる突起として一方に項部は平坦にして直に後頭結節に接するを他方に觸れ得べし之に依りて猶先進部が如何なる状態に骨盤内に入れるや又骨盤内何れの邊まで進入せるやを推知すること得べし

以上述べたる四段の方法に依る診察法は何れも精密なる注意

第五十九圖



桿狀聽診器の圖

る布片を被ひ直に耳を貼すべし然れども通常は聽診器を用

ご熟練を要するものにしてこれのみにて内診をなさずして十分妊娠中に於ける胎兒の狀態は勿論分娩經過の有様なごを推定し得るを以て必ず輕卒なる検査を行ふこと勿れ其外猶骨盤の構造を検せんが爲に脊柱彎曲の有無骨盤の形狀上腿骨に於ける異常の有無等を檢し更に外陰部に癍痕腫癩又は疣贅等の存せるや否や、下肢に浮腫ありや否や、靜脈瘤ありや否や等を検査すべし

之より更に進みて聽診を行ふべし聽診とは産婆自ら耳を用うるか或は聽診器を用うるか

第十六圖



兩耳聽診器の圖

う聽診器には種々の形あれども當時我邦にて用ゐらるるものは多くは圖に示す如きものなり一は第五十九圖の如く空

洞をなせる棒の如き細き管の端に耳を貼すべき廣き一端と聽診すべき部分に貼すべき圓錐狀をなせる一端とを具ふるものにして他のものは第六十圖の如く聽診せんとする部分に貼する一端を有する管ありて其他の端よりは長き二條のゴム管を出し其終端には耳内に挿入すべき小片を備ふ此形狀を有せるものにも種々の形をなせるものあり

此兩器の優劣如何は今茲に論ずる必要なきも余は前に述べたる方の桿状の聽診器を以て産科用に適當なりと信ず其耳端の形状又は聽診部に貼する端の形状等種々あるべきも其桿状をなせる管の内部の太さ直徑六密迷(即ち二分)内外なるものを宜しとすゴム管を具ふるものは携帶に便なるを以て廣く使用せらる聽診器を用ゐて聽診を行ふには耳端を一耳に貼し或は兩耳に挿入し他の端を聽診せんと欲する部位に貼すべし總て聽診せんときは周圍を靜かにし意を專らにして之を聽くべし

妊婦を診察する時に聽き取り得べきものは次の如し

胎兒より發するもの

(一)胎兒の心音

(二)胎兒の運動に因りて起る雑音

(三)臍帶の雑音

妊婦より發するもの

- (一)子宮雑音
 - (二)大動脈音
 - (三)腸管雑音
- 等なり

胎兒の心音は胎兒の軀幹が子宮壁に最も近く存する處に於て最も明瞭に聽取し得るものにてト、ト、トと定期性に聞え之を算するときは一分間に百二十回乃至百四十回なるべし

通常兒背ある部位に於て明かに之を聽くものなり

胎動によりて發する雑音は低くして短かく衝突するが如き音なり概ね同時に胎兒の運動を聽診器にまで傳達して觸知

することあり

臍帯の雑音は弱きズツ云ふが如き響にして胎児の心音と

一致するものなり臍帯の輕き壓迫捻振或は結節するに由り

て生ずることありて甚だ稀に之を聴くのみ

子宮雑音は子宮内にある血管の血液循環に因りて起るもの

にして其強さは種々なれども妊婦の脈搏に一致してズツ

云ふが如き響なり子宮の兩側に於て聞くこと多し

大動脈音は時として聴取せらるる音にて妊婦の脈搏と一致

して低き音を聞く又同時に大動脈の搏動を觸るることあり

腸管雑音は時として雷鳴状なることあり或は泡沫の消ゆる

が如きことありて一定せず之れ腸管内に於ける瓦斯が腸の

蠕動に因りて動く爲に起るものなり

若し視診又は觸診に依りて骨盤に狭窄ありと考へらるる時は
次に述ぶる方法に依りて計測を行ふべし

第七十五節 骨盤外計測法

骨盤を測定するには内外二種の方法あり内計測法には種々の
の困難あるを以て通常外計測法を行ひて骨盤腔の大小廣

狹を推定す

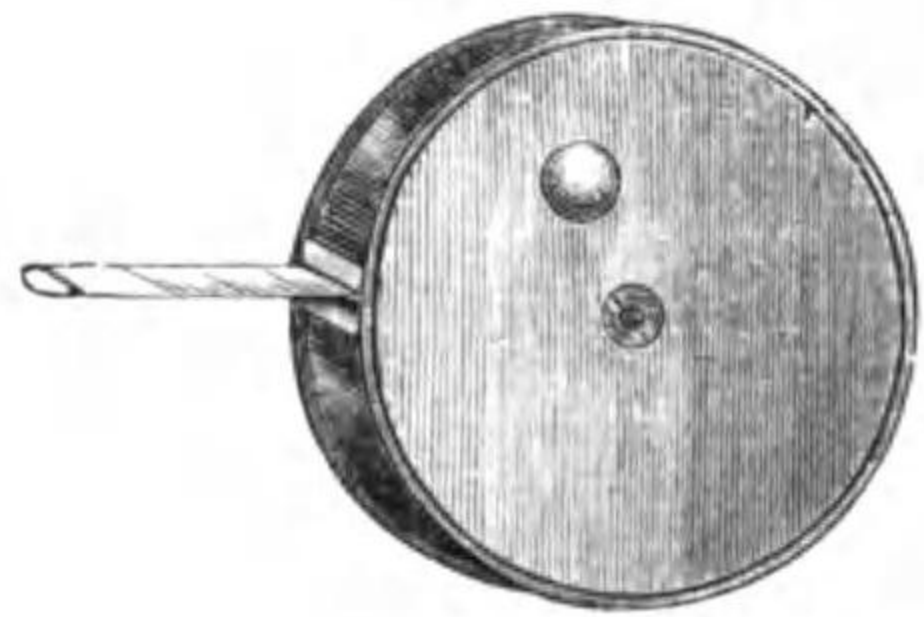
外計測法の内に必要なるものは次の如し之によりて骨盤上口の狭窄

せるや否やを推定するを得べし

骨盤周圍を測定するには卷尺を用

うるを便なりとす之を後方第五腰

第十六圖



卷尺の圖

欠

圖二十六第



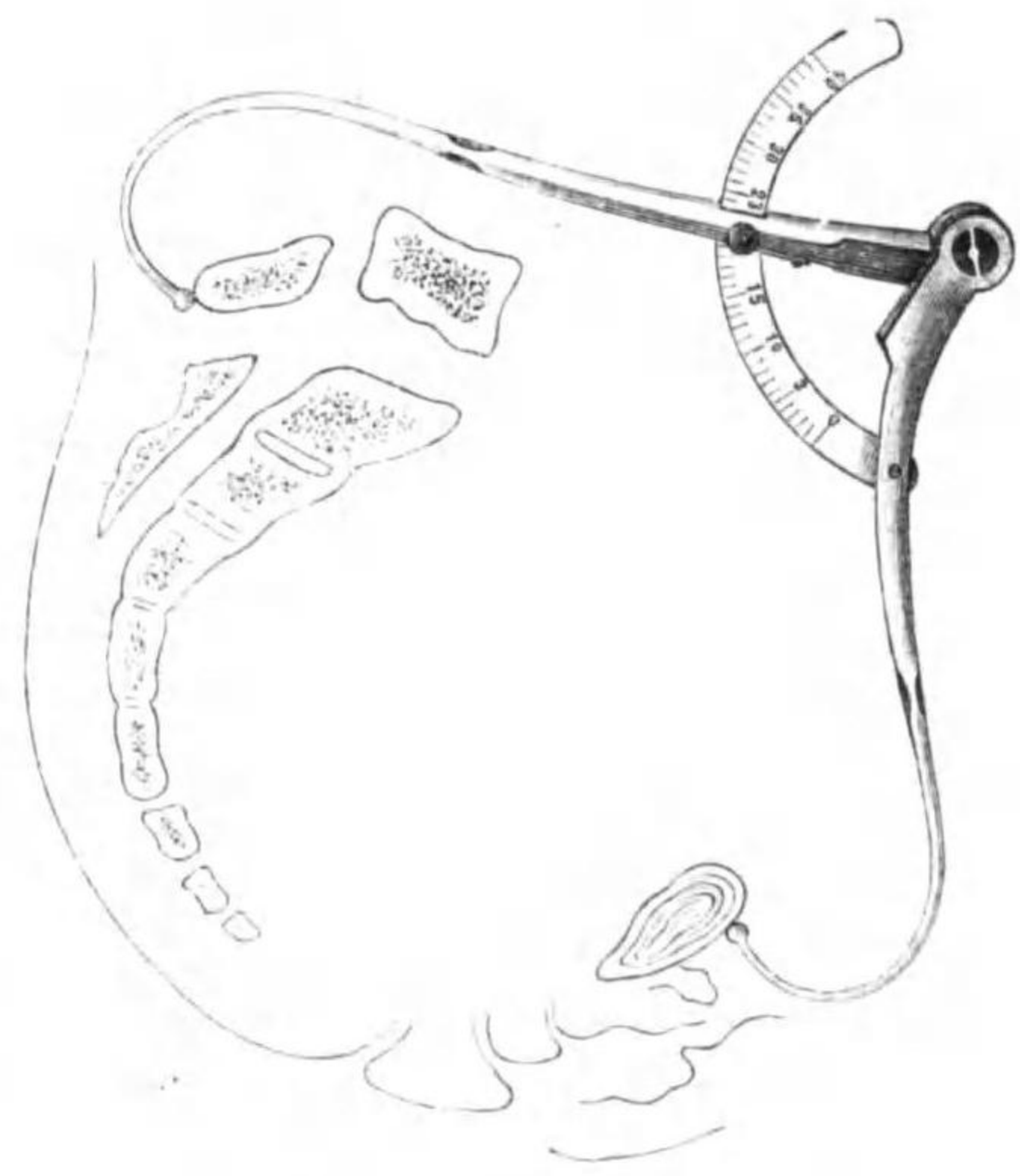
圖の計盤骨

椎の棘状突起の上に置き兩端をこりて前方に回はし上腿骨
 大轉子と腸骨櫛の間を通りて耻骨地平枝に沿ひて耻骨縫合
 に於て合すべし其大きさは各人の肥滿せると瘦削せること
 少しく異なりと雖も約七十五乃至八十仙迷(大凡二尺
 五寸乃至二尺八寸)なりとす其他の徑線を測定するには骨盤
 計を用う骨盤計は第六十二圖の如きものにて一端に關節あ

りて其傍に劃度板あり他端
 は二個の鈕ありて自由に開
 閉するを得其開きたる二個
 の鈕の距離は劃度板の上
 今骨盤計の兩脚を開きて測

欠

圖五十六第



骨縫合の上縁に至る距離を云ふ耻骨縫合の上縁は容易に之を見出し得べきも第五腰椎の棘状突起は之を見出すに多少

尖に於て通常一個の棘状突起を觸れ猶其直に上方にありて

骨盤部の縦断面に由りて外結合線を測定する點を示す

の困難あり然れども通常は臀部の上腰部の中央に斜方形の陥凹ありて其左右兩側の角は恰かも腸骨の後上棘の位置に相當す之によりて腸骨の兩後上棘を見出し之を結合したる線の中

少しく強く隆起せる棘状突起あり之れ即ち求むる處の第五腰椎の棘状突起なり故に其尖端に一の鈕を加へ前方耻骨縫合の上縁に他の鈕を加ふれば其距離を見出し得此際には鈕を加ふるに先ちて第五腰椎棘状突起尖端の部は朱墨又は蠟筆等を用ゐて記號をなすか或は介助するものに指頭を以て其處を軽く押へしむる時は計測殊に容易なりとす其長さ平均約十九仙迷大凡六寸三分なりとす

左右外斜徑線は一側の腸骨後上棘より他側の腸骨前上棘に至る距離にして其距離平均約二十仙迷大凡六寸六分なり大轉子間距離は兩側上腿骨大轉子の距離にして上腿外側面を腸骨櫛より下方に向ひて求むれば容易なり其距離は大凡二十八仙迷大凡九寸二分なり

第七十六節 内診法

以上計測の結果に由りて略骨盤上口の廣狹を知り得べし即ち腸骨前上棘の距離と腸骨櫛間距離と共に縮小せるべきは骨盤上口の横徑が狭小なりと推定し得べく外結合線の短縮は骨盤上口縦徑(又は眞結合線)の狭小を外斜徑線の短縮は骨盤上口の相當せる斜徑線の短縮を推知し得べし又大轉子間距離の短縮は骨盤濁の横徑線の短縮を推知し得べし若し計測の結果平均の計測數よりも小なるときは骨盤狭窄せるものこそ考へ得べきを以て醫師に指圖を乞ふべし然らざれば娩産に臨みて甚しき不幸を見るの虞あり

内診は必ず清潔に消毒をなしたる手指を以て謹慎して

之を行ひ一定の法則を守り決して之に背きたる處爲あるべからず然らざれば妊婦又は産婦の状態を検査し之に依りて妊婦又は産婦に適當なる介助を與へ平易に分娩を終らしめんとする大切なる目的に反し却て婦人の健康を害し甚だしきに至りては其生命を危くすることあるものにして若し斯ることを生じたる場合には道德上の罪人となるのみならず法律上の責も亦免かるゝこと能はざることあり故に注意の上にも注意し謹慎の上にも謹慎を加へざるべからず

故に産婆は妊婦又は産婦に接するには常に清潔を守らざるべからず殊に内診の際には充分に消毒清潔の方法を盡さざるべからず

世俗一般に消毒と云へば消毒薬液に手を浸し或は器械を浸すを以て足りりと考ふれども單に此等の方法のみにては完全なる消毒と云ふことを得ず又方今行はるゝところの消毒法にても手指の清潔消毒法は殊に困難なりとす是れ手指には他の器械等の如く高度の熱又は蒸氣などを以て消毒を行ふことを得ざるを以てなり故に第一編第三章に述べたる方法に従ひ常に不潔なるものに觸れざる様に注意し且時に臨みて綿密なる消毒法を行ふべし

而して消毒によりて清潔となりたる手指器械等にてても一度他の消毒を行はざるものに觸るれば再び消毒清潔法を行ふにあらざれば危険の虞なしと云ふを得ず故に用を終るまでは決して消毒せざるもの又は消毒

したるものにて必要なきものに觸るべからず
 内診を行ふには法に従ひて外陰部を清潔にしたる後充分よく
 消毒したる手指通常は示指のみ必要ある時は示指、中指を用
 る消毒薬液にて潤ひたるまゝ之を拭ひ又は乾かすことな
 くして五%石炭酸ワゼリン又は石炭酸オレーフ油又は殺菌
 せるワゼリン又はオレーフ油を塗布し他手の拇指を示指
 こにて陰脣を哆開し然る後徐かに腔の後壁に沿ひて深く
 腔内に挿入すべし而して腔穹窿部に達せば更に子宮腔部、子
 宮口、頸管等の状態を検し若し子宮口又は頸管開きたる時に
 も粗暴に之に觸接することなく殊に胎胞の存せるこき
 には之を破ざる様注意することとを要す又陣痛既に始まれ
 る場合には必ず陣痛間歇時に於て診察をなし若し内診中

に陣痛發作あらば靜かに其歇むを待つべし且餘り長時間に
 渉る内診を行ふべからず此等の法則は充分注意して之を守
 り叨りに粗暴なる内診をなすべからず爲めに種々の異
 常を來し不幸なる結果を見ることあり
 内診を施すには仰臥せしむるを宜しとす而して其兩脚は少
 しく開き股關節及膝關節に於て中等度に屈曲せしむべし
 先づ腔内に挿入せる指に由りて腔腔の粘膜に異常なきや否
 やを検し更に前腔穹窿部に於て胎兒の先進部を觸れ胎兒
 の何れの部分先進せりや其移動し得べきや或は既に骨盤内
 に固定せるやを検し然る後子宮腔部に至り其既に消失せ
 るや猶存せるやを知り若し存在するときは其長さ及び形狀
 を認め次に子宮外口に至りて其哆開せるや否や其形狀及

其前後兩層の厚きか既に薄くして銳き縁を有するや或は緊張せるか弛緩せるかを觸知すべし若し分娩開始し胎胞子宮内に存する時は其緊張の度並に厚さ等に注意すべし固より前に述べたる如く之を破るべからず次に注意して先進部の骨盤に對する關係を検せざるべからず此點に就ては更に分娩時の診察法を説くこき詳に述べべきを以て之を参照すべし

既に子宮腔部子宮口等の状態を觸知し得たる後は骨盤腔の充分なる廣さを有するや否やを検し最後に會陰の柔軟にして伸張し易きや否やの性質を検すべし骨盤腔の潤さは内診する手指に依りては只其大體を知り得るのみ然ども容易に指を薦骨岬に達し得べき場合あらば

骨盤狭窄せるものなることを知る

- 即ち普通内診に由りて知るべき要件は
- (一) 會陰及び腔子宮頸管の性質殊に其伸張し易きや否や
 - (二) 骨盤腔は狭窄せりと認むべきや否や
 - (三) 胎兒の先進部は何れの部分にして骨盤に對して如何なる關係に在りや
 - (四) 妊娠の終期ならば分娩既に開始せるや否や等の諸點なり
- こす固より必要なる場合には經産と初産との區別等をなすべきことあり
- 總て診察の所見は永く之を記憶すべきものなれば寧ろ之を記録して保存するを宜しとす

第七十七節 初妊と經産との鑑別

既に前に述べたる處の徴候を丁寧なる診察によりて檢すれば
容易に初妊と經産との區別をなすことを得べきも此鑑別は
時として困難を免れざるものなれば更に之を繰返して述べ

べし

妊娠と分娩との爲に生じたる種々の變化の中には後に至りて
も其痕跡を残すものあれば之に依りて鑑別をなす

乳房は初妊婦にては緊張して懸垂するこなきを通常とす

れども經産婦に在りては弛緩して懸垂し乳頭も亦弛緩して
長きを常とす

腹壁の緊張も亦初妊婦にありては強く經産婦にては弛緩す妊

欠

頃より漸次に短縮し妊娠末期に至れば全く消失し其子宮口の邊縁は薄くして鋭し然れども通常子宮外口は分娩始まるまで開くことなし經産婦に在りては子宮腔部は硬軟一様ならずして其表面不正に凸凹あり妊娠第八九箇月の頃に至りては多少短縮するも初妊婦の如く著しからずして分娩始まりて後に消失す然れども子宮外口は妊娠後半期に至れば既に漏斗状にして指頭を挿入し得べく其邊縁は厚くして不正なり

此等の徴候に注意すれば初妊婦と經産婦との區別をなし得べきも以前の妊娠は終末にまで至らずして流産早産等をなせるときは其變化も亦妊娠經過の長短によりて多少あり又前回の分娩より年を経ること久しければ其變化不明となり

るここあり又腹部の腫瘤或は腹水等に因りて腹壁の弛緩妊娠線等を残すことあり又分娩に因らざるも疾病外傷又は手術の爲に外陰部腔壁子宮腔部等に瘢痕其他の變化を残すことあれば此等の點に注意して診断を誤らざることを要す

第七十八節 複胎妊娠の診断

複胎妊娠のときは腹部の膨大割合に甚だしきこと同じき胎兒の部分を多く觸知すること即ち二個以上の頭部臀部又は單胎にはあり得べからざる多數の小部分を觸知すること等に由るべきも最も確實なるは異なる速の胎兒心音を異なる場所に於て明かに聽取し其聽取する場所の中間に心音の全く聽へざる部分又は微かに聽ゆる部分あることなりとす

固より單に心音のみに依りて判斷するときは誤りに陥り易ければ胎兒部分の多く觸知し得ることをも認めざるべからず而して複胎妊娠は羊水過多なる

第七十六圖



雙胎妊娠にて兒位に取れるものを

等には區別し難きことあり殊に複胎妊娠には羊水過多を兼ねるにありて診斷の困難なることあり

の腫瘍と單胎妊娠との共には羊水過多を兼ねるにありて診斷の困難なることあり

第七十九節 妊婦の攝生法

既に前に述べたる如く妊娠は疾病にあらざるが故に其間の攝生法も亦平素の攝生法と異なることなし然れども婦人體内には急劇に大なる變化を來すものなれば平常に比すれば僅かなる不攝生も諸種の疾病を誘起すの基となり易き故に一層の注意を要す
飲食物は平素の嗜好に従ひて之を用ゐしむべし其量の如きも強て増減するに及ばず然れども成るべく消化し易く風氣を醸すことなき食物を用ゐる香料(芥子、胡椒、唐椒)の如し、酸味強きもの、強烈なる酒類、多量の濃厚なる茶、咖啡の如きは之を避くるを宜しとす妊娠中嗜好に變化を起し香料を多量に用ゐる爲

に流産を來したるものあり
 妊娠中は殊に大便の通利を注意すべし毎朝悪心吐逆あるが
 如き場合に於ては特に然るす便秘の傾あらば適宜の運動を
 なし又は毎朝清水を飲み或は淡薄にして風氣を醸すことな
 き少量の野菜果物等に由りて毎日一二行の通利を得るを宜
 しとす若し其等の方法効なくば「グリスリン」又は石鹼水の浣
 腸を試むべし然るも反覆之を行はずして成るべく習慣を得
 て毎日上厠するに至らしむることを務むべし若し浣腸を行
 ひて効なければ醫師の指圖に従ふべし又下痢あるときは食
 物に注意し不消化なるものを避くべし尿意あらば其度に排
 尿すべし長く之を忍ぶは害ありとす
 妊婦の適宜なる運動は便通を能くするのみならず健康上甚

だ大切なることなれば通常の家事を處置する外各自に適宜
 なる程屋外に出で成るべく清爽なる土地に散歩すべし又屋
 外の散歩は只に身體の運動のみならず新鮮なる大氣を呼吸
 する爲に甚だ有益なり屋外にても多人數集會したる場所な
 ぎに長座すること甚だ宜しからず
 異常なき妊婦長く屋内にありて坐業をなし或は臥す等のこと
 は却て害あり殊に本邦婦人の裁縫に従事すること長時間に
 渉るが如きは最も忌むべきことなり其他長途又は惡道を
 人力車又は馬車に乗り或は長時間汽車に乗り或は乗馬、
 奔馳、飛超、其他重きものを提げ或は扛げ或は荷ひ或は高
 所にあるものを取り下し或は高所に物をあげんとして
 力を用ぬ重き抽斗を開閉するが如きこと屢階段の昇降

をなすが如きこと其外洗濯張物等總て甚だしき身體の運動は害ありとす殊に努責を要するが如きことを避くるを宜しとす故に平生の狀態に應じて適度の運動を行ひ決して輕卒ふることかき様に勉むべし

世人妊娠經過中長途旅行などをなすに或は後半期を以て安全なりとし或は前半期を以て安全なりとし故に同一なり又前回の妊娠中長途の旅行をなし安全なりし故次回にも亦之を試みんとするものあり斯る場合にも必ず前回を以て標準となすことを得ざるものなり

妊娠中に於て下腹に痛み覺ゆるか又は時々緊張の感あるか又は胎兒下降せるが如き感あらば運動を少くしなるべく安靜を守らしむべし殊に妊娠末期に至りては斯の如き感を來す

こと多きものなれば注意を與ふべし

其他妊娠中に於ける交接は最も注意すべきものなり殊に妊娠末期に至りては之を禁すべきものなり若し分娩に先づ數日前まで之を行ふ時は産褥熱を起すの恐なしと云ひ難し

過劇なる運動の妊婦に害あるが如く過度に精神を勞することも亦害ありとす故に妊娠中は睡眠を充分ならしめ無益に精神を用うることなからしめ喜悲の情を劇しからしむる如きことは之を避べし又妊娠中に分娩に對して其困難を思ひ或は畸形兒などを生むことなきやなどの無益なる心配をなすもの多ければ斯る場合には務めて之を慰諭すべきは勿論難産其他不幸なる分娩に關しては決して談話すべからず稗史小説を讀み演劇音樂を見聞くが如きも感情を

動かすこと大なるのみならず長時間雑鬧の内に在り或は端坐するものなれば其害少なからず
 衣服は成るべく寛濶にして時候に應じて充分温保の目的を達するを以て足れりこす叨りに衣を襲ねて煩しきに至り爲に身體の運動を妨げ或は強く緊りて胸部腹部等を壓迫するが如きことは宜しからず幅廣き重き帶などを用うるは害あり
 腹帯は懸垂腹こなれる妊婦には必要なれども正規の妊娠に於ては之を用うるの必要を見されども温保の目的と胎兒の位置を保つ目的には全く無効なりと云ふことを得ずされば舊慣を守りて所謂結肌帶をなすも可なり斯かる場合には廣き布片を用る緩やかに之を纏ふを宜しとす之に依りて胎

兒の發育を妨げ分娩を容易ならしむと云ふが如き俗説に従ひ緊縛を加ふることは決して之をふすべからず却て害を來すことあり

又近頃本邦にて屢用ゐらるゝ莫大小製の婦人用半股引或は洋服の下衣に用うるペテークートの如きは平常の用にも甚だ可なり殊に妊娠中温保の目的には適當なるものなり

浴湯は通常の全身浴は毎日一度位之を用うることは害なきも長時間を費すこと浴後感冒せざることに注意すべし然れども他の温泉浴海水浴坐浴等は醫師の指圖を受くるにあらざれば之を行ふべからず

妊娠末期に至り粘液の分泌著しきときは一日數回微温湯を以て外陰部を洗ふべし若し其分泌物甚だ多量なるときは

の洗滌を要するところあれば醫師の指圖を受くべし
 乳房は分娩後授乳の必要あるものなれば既に妊娠中に注意し
 て不潔物などの乳頭に附着せるときは屢石鹼と微温湯とを
 用ゐて清潔にし損傷あるものは醫師の指圖を受けて之を處
 置し皮膚の薄弱にして損傷し易きものは冷水又は酒精等
 を用ゐて屢之を洗ひて損傷を來さぐることを謀るべし若し
 乳嘴突出せずして扁平なるか或は陥凹せるときは分娩
 までに日々之を引出し哺乳に適せしめざるべからず通常は
 清潔なる指頭を以て屢之を引き出し且つ揉むを宜しとす或
 は吸乳器を用ゐる或は吸角を用ゐて引出すことあり
 總て妊娠中俗間に行はるゝ妄説を信じ爲めに危害を來す
 ことふきにあらざれば産婆は宜しく之を妊婦に諭し無

稽の妄信に因りて百年の生命を害するふからんことを
 務めざるべからず若し處置の明かふらざるものあらば
 之を醫師に諮り輕卒粗漏の事なきを期すべし

第三編

正規分娩の経過及産婦の取扱法

第八十節 分娩の種類

分娩(出産、娩産、産)とは卵子が一定の産道を経て母體より排出せらるるを云ふ即ち陣痛の開始より後産の娩出を終るまでを云ふなり此作用は多くは天然力によりて平易に終るものにして之を自然産と云ふ然れども又往々異常を生ずることありて爲に醫師の力を藉りて分娩を終らしむる必要を生ずることあり之を人工産と云ふ

分娩は其異常の有無に由りて正規分娩及異常分娩の二つに分つことを得

正規分娩とは妊娠四十週の後に起り其作用は單に自然の力

のみにより母子共に危害を受くることなく胎児は生命を完

くして生るくものを云ひ然らざるものを異常分娩と云ふ

分娩は其起る時期によりて流産、早産、定期産及び晩産の四に

分たる

(一) 流産(又は不熟産)とは妊娠第二十八週以前に分娩するものを

云ふ其分娩せる初生児を未熟嬰兒又は不熟嬰兒と云ふ

(二) 早産とは妊娠第二十八週乃至第三十八週に於て分娩するも

のを云ふ此時期に於ける初生児は早熟嬰兒なり

(三) 定期産とは妊娠第三十八週乃至第四十週に於て分娩するも

のを云ふ即ち成熟せる初生児を得べし

(四) 晩産とは妊娠の經過普通よりも長くして四十週を超たる後

分娩するものを云ひ其生児は過熟嬰兒なり

妊娠第二十八週以前に生れたる胎児は生後全く生活を保ち得

ざるを常とするものなり然れども近時學術の進歩と共に充

分なる養育に由りて極めて稀に生命を全くするものあるに

至れり

妊娠第二十八週乃至第三十八週に於て生れたるものは細心注

意して看護せば生命を保持せしむることを得べし定期産に

て生れたる成熟嬰兒にても不注意なる保育をなせば生命に

危険を來すことあり

又分娩せる胎児一なれば單産と云ひ二以上なれば複産と云ふ

第八十一節 娩出力

胎兒は陣痛及腹壓によりて母體より排出せらるこの陣痛と腹壓とを娩出力と云ふ

陣痛とは疼痛を伴ふ處の子宮の收縮にして之に由りて分娩は開始し、經過し、終局するものなり陣痛は次に述べる處の特性を有し容易に他の疼痛と區別し得るものなり即ち陣痛は續きて痛むものにあらずして發作性に起るもの即ち痛ある時と痛なき時と交代し其疼痛は起り始る時には軽くして漸次に強烈となり極度に達すれば暫時持續して後漸次に弱くなり終に全く消失す此疼痛ある時期を陣痛發作時と云ひ疼痛なき時期を陣痛間歇時と云ふ
陣痛は初め薦骨部に起り腹部に廻り延きて臍部及鼠蹊部に及ぶ而して陣痛甚だしく強烈なる時には其痛は上腿及び下

腿に向て放散するものなり

陣痛發作の間は子宮は固くなりて腹壁に近づき明に前方に

突隆す陣痛は前述の如く子宮の收縮によりて起るものなれば

陣痛の間子宮の固くなる理由も自ら明なるべし之れ子宮

は筋肉組織より成るものなれば他の筋肉と等しく收縮の際

に固くなるものなり

陣痛は分娩を開始し之を催進するものなり

産婆は疼痛を伴ふ子宮の收縮を何れも皆分娩を催進する陣痛

なりと速断すべからず即ち殊に初産のものに在りては妊娠

の末期に於て子宮に收縮起り疼痛を伴ひ其疼痛は時として

は随分強烈にして眞の陣痛に類することあるも前に述べた

る陣痛の徴候を缺くのみならず此疼痛に由りて分娩の進む

ここなし之を前驅陣痛又は豫備陣痛と云ひ稀に之に引續きて眞の陣痛の起るここなきにあらざるも大概は數時間持續したる後に消失すかゝる状態は時として反覆して來ることありと雖も妊娠は依然として持續すれば之によりて數日の後に眞の陣痛の起るべきことを豫期し得べし故に産婆は妊婦に疼痛を伴ふ子宮の收縮を認むるも今將に分娩せんとする諸徴候を明に具ふるにあらざれば輕々しく之を陣痛なりとし分娩開始せりと斷言すべからず而して陣痛即ち子宮の收縮は産婦の意志に隨ひて増減し又は發作間歇せしむることを得ずして全く不隨意に起るものなり

腹壓は腹壁の皮膚の下に在る筋肉の緊張と横膈膜の緊張とに

由りて生ずるものなり殊に分娩の末期に於て陣痛を助け

て娩出を促すものなり此腹壓は産婦の意志に由りて加減し得るものなれども胎兒娩出の直前には殆ど不随意に起りて強く努責するに至るものなり近來の説によれば胎兒を娩出する作用の大部分は腹壓に基くものにして陣痛は却て之を助くるものにして其主なる作用は娩出の際に於ける子宮の位置及胎兒の位置を正ふするものなりと云ふものあり

第八十二節 分娩經過の時期

分娩とは陣痛開始より後産の娩出を終るに至るまでの間を云ふこと既に述べたるが如し今之を次の三期に區別す

第一期即ち開口期(準備期)

第二期即ち娩出期排出期

第三期即ち後産期(娩隨期)

第一期は陣痛の開始を以て始まり子宮口の全く開大するを以て終る

第二期は子宮口の全く開大せる時を以て始まり胎兒の娩出を以て終る

第三期は胎兒の娩出より後産の娩出を終るまでを云ふ

第八十三節 正規分娩の經過

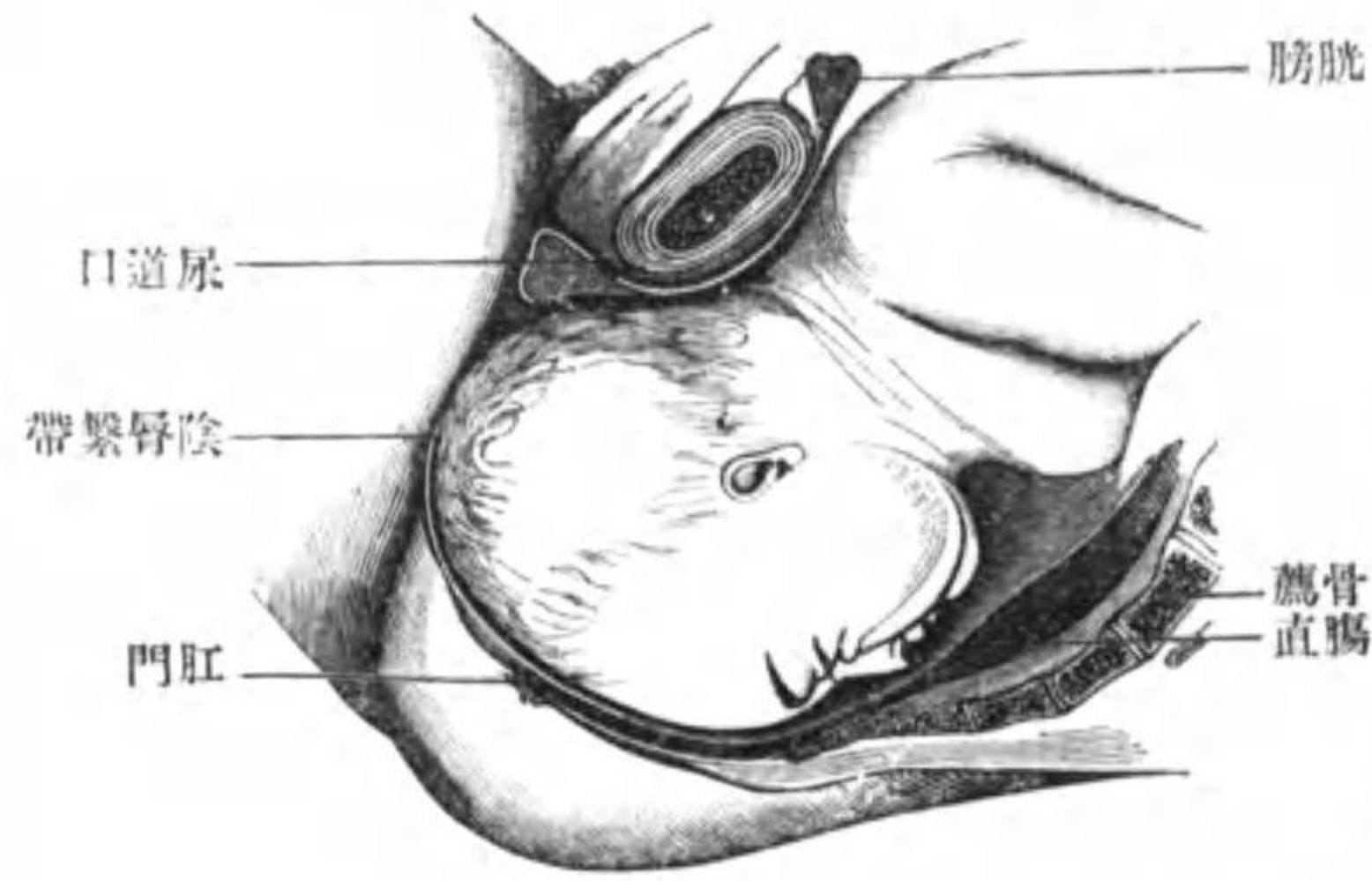
子宮は筋肉組織より成る嚢にして妊娠の時には其中に卵子を以て充さるゝが故に其收縮始まる時は卵子は直に壓迫を蒙る、されど子宮の收縮は一様に起るものにあらずして子宮

欠

欠

陣痛間歇時にも弛緩することなくして緊張したるまゝに止まる、かくる有様は卵胞の將に破裂せんとする徴候なり斯して子宮口は開大せられて極めて菲薄となり増々開大せらる通常之に次で陣痛發作の時に於て卵胞破裂し羊水の一部份即ち前漏水又は前水を漏す之を卵胞破裂又は破水と云ふ其時期は子宮口の直徑少くも六仙迷以上に開大したる後なるを常とす而して子宮口漸次に開大して全く其邊縁を認むることなきに至れば子宮口は全く開大せるなり子宮口の全く開大せる時は其直徑大凡十一乃至十二仙迷あり若し卵胞早く破裂する時は陣痛は強くなるも子宮口の開大は徐々なり故に自然に破水したる場合の外は子宮口の全く開大するまでは成るべく卵胞の破裂せざる様注意

第七十八圖



兒頭排時臨側より見ると面を示す

が爲に疼痛を感じ産婦は顔面潮紅、心身不安、全身に汗を流し、
 努責して強く腹圧を加へ、恰も秘結せる便を排泄せんとする
 が如く上腿又は腓腸に痙攣等を發するに至るころあり而し

て陣痛の際に下降せる兒頭は間歇時には再び退き、只其一小部分
 を陰唇の間に現はす、此の如き時期を兒頭排臨す、云ふ此時期に
 於ては會陰部は甚だしく緊張せられ、肛門翻轉して不隨意に便を
 洩すころあり而して終に兒頭の大部は陰唇の間に露出し、來り間
 歇時と雖も再び退くころなく

するは分娩の経過を平易ならしむる爲に必要なり
 又破水に際し屢明に一種の雑音を聽取し得るころあり、産婦は
 此感覺によりて體內に於て何物か破裂せしにはあらずやと
 懸念するころあり、故に産婆は臨産婦に對して前以て此事を
 心得させ置くべし
 陣痛に由りて子宮口充分に開大し、卵胞は破裂して羊水漏出す
 るや、胎兒の下向部又は前置部は増下降し、陣痛は益々強くな
 り、陰部より帶紅色の粘液を漏出するころあり、之れ分娩の
 愈始まれるを示すものなり、之より陣痛相次ぎて至り、發作は
 強く且長くなり、間歇は短縮し、胎兒下向部は愈降下して終に
 骨盤下口に達し、會陰部は膨隆し、兒頭は陰唇の間に顯はれ、疼
 痛は其極度に達す、又陣痛間歇時にも兒頭は軟部を壓挫する

第七十九圖



兒頭の撥露の時、側面より見たり、顔を断すに示す

して次第に娩出するに至る此時期を兒頭撥露す云ふかく

の如くして最後の陣痛に由り

て兒頭娩出す兒體を排出す

るには之に次ぎて起る一二回

の陣痛にて足れり

陣痛は分娩の初期には子宮口の

開大を促すものにして初は十

分乃至十五分の間歇を以て十

五秒乃至三十秒の發作あるも

漸次に強烈となり四五分時に

反復するに至る之を開口期

陣痛と云ふ末期には娩出を促

三〇

欠

欠

圖二十八第



胎母の體面を露し出て娩する状態を示す

然に娩出するか或は輕き腹壓により或は手を以て子宮底を軽く按腹すれば容易に排出せらる(第八十一圖)然れども往々胎盤は翻轉するこゝなくして降下し母體面を以て陰層の間に露出するこゝあり

分婁は單に陣痛のみに由りて遂げ得べきものは尙少量の血液を漏す

(第八十二圖)而して後産の娩出によりて分婁は全く其終を告ぐるものこす此際子宮は收縮して其底部は殆ど臍窩の高

出の主力は陣痛に在り、雖も之を助くるものは腹圧なり。
 (第八十一節を参照せよ) 殊に分娩の第二期及び第三期に於て
 然り、こなす腹圧は子宮の上に壓を及ぼして既に開口したる
 子宮の中にある胎児の陣痛に由りて排出せらるゝことを容
 易ならしむ。然れども子宮口の開大せざる間は腹圧は分娩に
 効なし、且分娩の第二期の終に於て、兒頭娩出せんことを
 腹圧極めて強烈なるときは、兒頭の排出速に過ぎ、爲に裂傷を
 生ずるの恐あり、故に分娩第一期中及第二期の終には産
 婦に腹壓を禁ずべし。

第八十四節 分娩時に於ける胎児の位置

自然産は縦位にて経過するを通常とす、故に胎児の頭部又は骨

第三十八圖



頭の位圖

盤端部は下方に向ふなり、之によりて縦位を

頭位と骨盤端位

この二に分つ頭位は分娩の大多數は之に

よるものにして、更に體勢に由りて、願部は胸部に近づきて(即ち普通の體勢)後頭部の最も下方に向ふもの(即ち後頭部の先進せるもの)を後頭位と云ひ、頭位分娩中の多數

圖 四 十 八 第



圖 の 位 端 盤 骨

はこれによる又胎兒の頭部の少しく後方に傾き頤部少しく

如くして分娩に際しては顔面の最も先進するものを顔面位より少しく前頭部と云ふ若し頤部が胸部を離るゝこと顔面位より少しく前頭部は頤部に接するが

胸より離るゝもの
即ち分娩に際して
は前頭部の最も先
進せるものを前頭
位と云ふ又頭部の
甚しく後方に傾き
頤部は胸部より甚
しく遠かり後頭部
は頤部に接するが

骨盤端位に於ては尾骶部最も下向し兩足は尾骶部に近く位せずして内診に際し觸知し得ざるものを尾骶位と云ふ足の尾

部より先に下向するものを足位と云ひ膝の下向するもの

此等の體位及體勢を取りたる胎兒の骨盤を通過するに際し其背部が母體の左右何れかの方に向ふことによりて體向を分

つ即ち前に述べたる如く胎兒の背部母體の左方に向ふこと
は第一體向と云ひ背部右方に向ふことは第二體向と云ふ
例令ば後頭位に於て胎兒の背部母體の左側に向ふ時は之を後
頭位の第一體向又は單に第一後頭位と云ひ顔面位に於て
も兒背の左側に向ふときは顔面位の第一體向又は第一顔

面位めんゐと云ふが如し其他は推して知るべし
 又兒背またゑせいの左方さほう又は右方みぎほうに向ふと共に多少前方たせうぜんぽう又は後方こうほうに向ふ
 によりて各體向かくたいかうに於て背せの前方ぜんぽうに向ふものを第一分類だいいぶんるゐと
 云ひ後方こうほうに向ふものを第一分類だいいぶんるゐと云ふ
 胎兒たいじの位置ちゐ殊ことに頭位とうゐの區別くゑつべつには多くの産科學者さんかくがくしや種々の名稱なめいしやうを
 用うるが故ゆゑに讀む所の書籍しよせきに従ひて多少の差異さゐりあるべし故ゆゑ
 に今左いまさに其比較そのひかくをなして了解れいかいに便べんにせん

- 第一後頭位だいいこうとうゐは第一後頭位だいいこうとうゐ又第一頭蓋位だいいづがいゐと云ひ
- 第二後頭位だいいこうとうゐは第二後頭位だいいこうとうゐ又第二頭蓋位だいいづがいゐと云ひ
- 第一前頭位だいいぜんとうゐは第一前頭位だいいぜんとうゐ又第四頭蓋位だいいづがいゐと云ひ
- 第二前頭位だいいぜんとうゐは第二前頭位だいいぜんとうゐ又第三頭蓋位だいいづがいゐと云ふ

顔面位がめんゐは混雜こんざつを來すことなし
 縦位じゆうゐの外ほかに横位わうゐ或は斜位しゃゐと名くるものありて自然しぜんの娩産べんさんを遂と
 げ難がたきものあれども後編こうへん分娩べんべん異常いじやうを説とくに當りて詳つまひらかに之これ
 を述ぶべし
 上に述ぶる處ところの位置ちゐの内後頭位うちこうとうゐは最も胎兒たいじに危害がいすゐ少すくなき位ゐ
 置にして百回の分娩ひやくくわいべんべん中大凡ちゆうおほよそ九十五回は此位置このちゐを以て産うま
 る其中そのちゆう第一體向だいいたいかうを取るもの二回にくわいに對し第二體向だいいたいかうを取るもの
 一回くわい位の割わりなり其他そのた骨盤端位こつぱんたんゐは百回の分娩ひやくくわいべんべん中四五回ちゆうごくわいに過ぎ
 ず顔面位がめんゐの如ごときは極めて稀まれに見る處ところのものなり
 故ゆゑに先づ後頭位こうとうゐの分娩べんべんの經過けいこうを説とき充分じゆうぶん之を理解りかいするは最も
 必要ひつやうなりとす

第八十五節

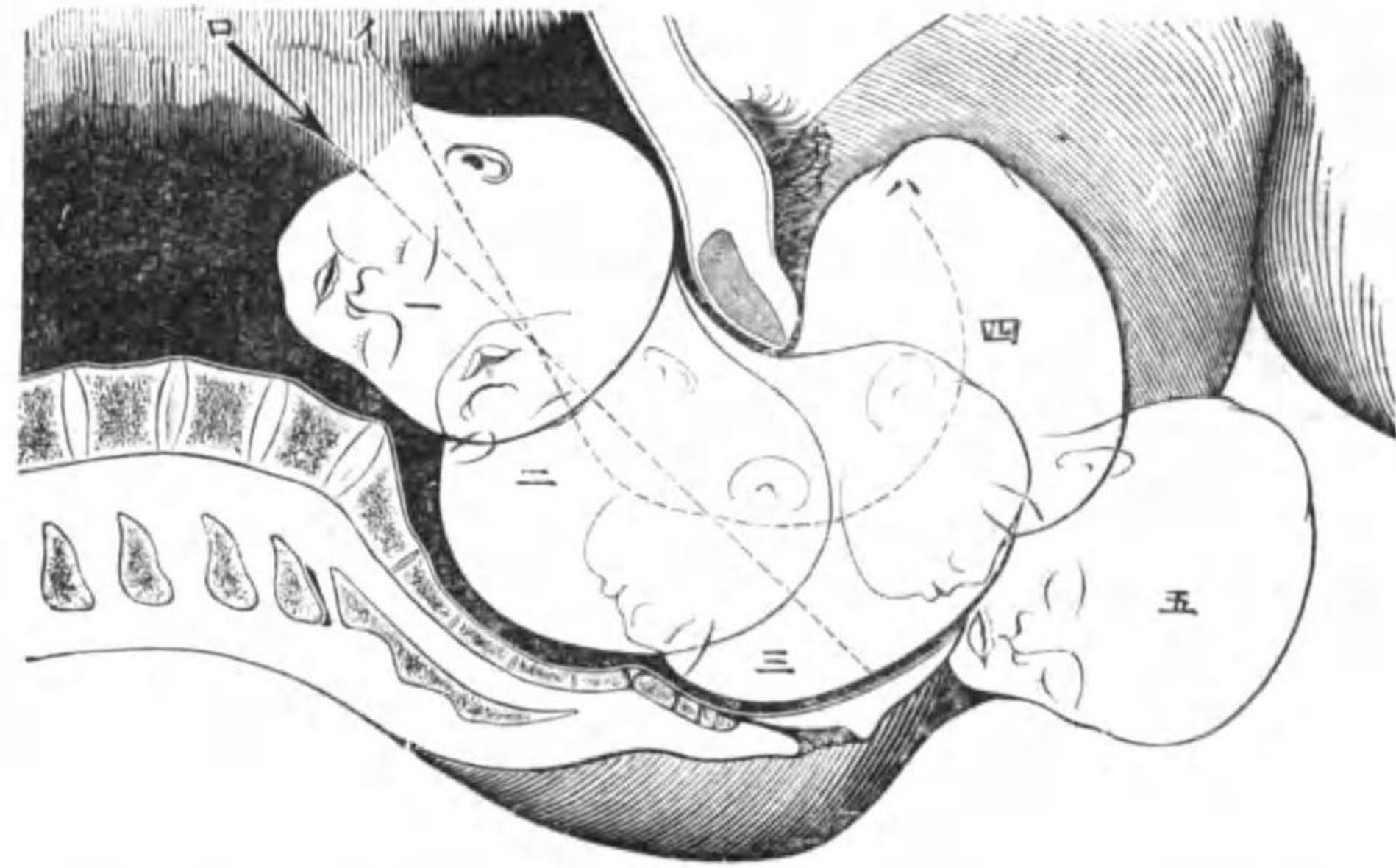
第一後頭位に於ける兒頭の産

道經過の方法即ち分娩機轉

産道は硬部と軟部とより成る硬部産道とは骨盤管にして或は之を骨産道とも云ふ軟部産道とは之を被ふものにて子宮頸、膈、外陰部を云ふ而して此産道若し單一なる圓壻狀の管ならば兒頭の壓出さるるにも複雑なる關係を生ずることなかるべし然れども産道は彎曲し且各部分其形を異にするが故に兒頭は産道を通じて若干の廻轉を爲さざるべからず其状態は今より順を逐ひて之を述べし通常頭部は頭位分娩に際し最初に出る處にして兒頭の産道を通過するに最も都合よき状態は胎兒が正しき體勢を取るこ

欠

第八十七圖



第一 後頭位に於て産道を通る有る様を縦斷面に示す

(イ)は骨盤軸の方向
(ロ)を以て示したる矢の方向は陣痛と腹壓と共に作用して兒頭を下方に押し出す方向を示す
一、二、三、四、五の数字は兒頭の漸次に下降し娩出する順序を示す

最初さいしょの陣痛ちんつうによりて
後頭部こうとうぶは下方かほうに
壓おさせられ頤部いぶは著いちじょう
しく胸部きょうぶに接せんす故ゆゑ
に小頤門せういもんは大頤門だいいもん
よりも深く下方かほうに
在りて最も先進せんしんす
るに至る之を第一だいいち
の廻轉くわいてんといふ猶引ひき
續つづきて起る陣痛ちんつうに
よりて兒頭じとうは骨盤こつばん

欠

内に進み之れと同時に廻轉をなし小顛門の在る處の後頭は前方に大顛門の在る處の前頭は後方に向ふ即ち第一後頭位にありては後頭は左側の閉鎖孔の近傍に前頭は右側の薦腸關節の近傍に在り矢狀縫合は左前方より右後方に走り右斜徑線(即ち第一斜徑線)の上に在り此状態は概ね兒頭恰かも骨盤潤を通過するこきに認め得るものなり

兒頭骨盤峽に入れば陣痛の發作する毎に小顛門は漸次に前方に向ひ大顛門は後方に向ふ

猶頻りに反復する陣痛の働きによりて兒頭は骨盤下口に壓排せられ其際後頭は更に前方に廻轉し恰も耻骨縫合の後方に前頭は薦骨の陷凹せる部分にあり矢狀縫合は前方より後方に走る即ち左方にありし後頭が前方に回り右方に在り

し前頭が後方に廻る之を第一の廻轉と云ふ陣痛尙働きて兒頭を會陰部に壓迫し會陰は陣痛毎に膨隆し且伸長せらる此際既に兒頭は陰脣の間より見得べし次で陰脣の間より表はれ陣痛毎に露出す兒頭の排臨及撥露の時期後頭全く露出すれば項部は耻骨縫合の後縁に小顛門の部は耻骨縫合の下縁に止まり次の陣痛の働により兒頭は更に廻轉を始めて頤部は胸部より次第に離れ陣痛の加はるに従ひて兒頭は大部分陰脣の外に表はれ會陰は緊張し光澤を有し著しく伸長し肛門開き其前壁隆起して現はるに至る

頤頂及前額が陰脣の外に出れば今まで甚だしく緊張したる會陰部は胎兒の顔面上を滑りて兒頭娩出せらる之を以て兒頭は第三の廻轉を終り更に其顔面は母體の右の上腿の内

側に向ふ此廻轉を第四の廻轉と稱ふるなり而して其の間
 に肩部は骨盤内に來り其横徑即ち肩幅は左斜徑線(即ち第二
 斜徑線上)に在り右肩は右耻骨枝の近傍に左肩は左側薦腸關
 節の近傍に在り而して漸次に陣痛に由りて右肩は前方に左
 肩は後方に廻り骨盤下口に來りたる時には右肩は全く前方
 に左肩は全く後方にあり
 肩の位置を示すには肩幅即ち兩肩を結合する直線によりてす
 若し此線が骨盤の縦徑線上に在るときは肩は直徑線上に在
 りと云ふなり故に此位置即ち第一後頭位に於ける分娩にて
 は兒頭娩出の後には肩は骨盤下口の縦徑線上に在り右肩は
 耻骨縫合の後左肩は會陰部に在り陣痛によりて前方に在
 る右肩の一部陰脣の内現はれ耻骨弓下に突張し後方に在

る左肩は徐に會陰を滑り超えて出づ既に肩部出れば他の軀
 幹は容易に娩出するものなり
 以上は後頭位の第一體向に於ける分娩の經過を示したるもの
 になれども胎兒が第一體向を取れる時にも兒頭の骨盤内通
 過の状態は第一體向に於ける時と同じく只左右の關係を異
 にするのみなり故に兒頭の矢狀縫合は骨盤上口に於ては
 骨盤の横徑線上に在りて後頭は右方に前額は左方に向ふ骨
 盤腔内に於ては兒頭は左斜徑線(即ち第二斜徑線)上に在り後
 頭は右側閉鎖孔の近傍に前額は左側薦腸關節の傍に在り骨
 盤下口に於ては兒頭は縦徑線上に在りて後頭は耻骨縫合の
 下に前額は薦骨尾骶骨關節の近傍に在りて兒頭の娩出したる
 後面は母體の左上腿の内側に向て廻轉す肩は骨盤腔内に

於ては右斜徑線(即ち第一斜徑線)上に在り骨盤を去るに臨みては骨盤縱徑線上に在りて左肩は耻骨縫合の下に右肩は會陰部に在りこす

第八十六節 産婦の診察法

産婆は分娩の經過に異常なきや否やと分娩の經過が何れの邊まで進めるかを察し産床に侍して如何なることをなすべきかを定めざるべからず故に先づ精密なる診察をなし之によりて豫め其分娩に對する總ての準備と介助の順序を考ふべし

此診察は内診及外診の二に分たれ其方法は妊婦の診察法と大差なきものなり(第七十一節より第七十四節までを参照せ

よ

一 尋問 婦人既に産に臨める時は先づ第一に陣痛の何時始ま

れるや陣痛には規則正しき間歇時を伴ふや否や又更に陰部より水様の液体漏出せしや否や即ち既に破水せるや否やを問ひ若しこれあらば何時なりしかを尋ぬべし然れども若し兒體の娩出には猶多くの時間を要すべしと考へらるゝが如き場合にて初度の診察をなすものなれば妊婦診察法の示すが如き既往の経歴に就て尋問をなすべし

二 外診 産婆は只陣痛間歇時に於てのみ外診を行ふべし陣痛

時に診察をなせば必要なる關係に就ては何の得る處もなく却て無益に子宮を刺激し時として危害を來すことあり其方法は妊婦に於ける診察の方法と同じ

三内診に先ち豫め手及陰部に嚴密なる消毒を行ふことを要す其方法は既に前に述べたる如し内診を行ふに際して注意すべきことは妊婦の内診に於けると同様にして精細に外陰部を見分泌物の多少又は潰瘍の有無を知りたる上一方の手指を以て陰脣を開きたる後他側の手指を腔内に挿入し徐々に骨盤軸の方向に従ひ腔穹窿及子宮口の方へ進む若し婦人臨産せる時は子宮腔部の消失せるを見出すべし次になすべきことは子宮口の所在を求むることにして子宮口は何處に在りや前に在りや後に在りや其大さ何程なるやを見るなり子宮口の大きさを定むるに一定の云ひ表しかたあり即ち一指を通すべしとか二指を通すべしとか或は二錢銅貨大なり或は手掌大なり或は何仙迷の直徑ありなご云ひ

表し若し子宮口縁の全く觸知し得ざる時は子宮口全く開大せり云ふ次に子宮口縁の状態平滑なりや將た鋸齒状なりや菲薄なりや將た肥厚せるや柔軟なるや將た硬靱なるや緊張せるや將た弛緩せるやを見るべし吾人は子宮口の位置大さ状態等を見たる後に卵膜の検査に移るべし即ち子宮口に胎胞箆在するや否や或は既に破裂して羊水漏出せるや否やを確むるなり大概の場合に於て此鑑識は容易なり殊に卵胞の前出部に多量の羊水ある時に於て然りこそす陣痛間歇時には弛緩してこれに觸るれば空氣を積きたる護謨球の如く之に由りて陣痛時に何程緊張するやをも略想像し得べく陣痛發作時には徐かに指頭を卵胞の一部に置くときは其緊張の度を知ることを得べし然れども羊水

極めて少量なる時には此判断は困難なることあり此時には
 卵胞は胎児の下向部と密接して存するが故に下向部の上に
 平滑なる皮膜緊張し居るにあらざるやを精細に觸診するを
 要するなり若し頭蓋先進し居れば觸診に際し破水後なれば
 直に頭髪を觸べし産婆は診察に際し指頭卵胞の處に達
 すれば之を損傷せざる様注意すること肝要なり何とな
 れば此不注意の爲に胎胞を破り正規分娩を變じて異常分
 娩となすの虞あればなり陣痛の際には卵胞は強く緊張し居
 り強力を用うるにあらざれば胎児の先進部を明瞭に診察す
 ること能はざるものなれば産婆は陣痛發作時には指を動か
 すことなくして陣痛の止むを待ち只陣痛間歇時に於てのみ
 診察すべきこと外診のときに同じ而して務めて徐かに之を

行ひ決して強力を用うべからず

次に産婆は診察に際し子宮口に限られたる部の胎兒先進部の
 みを觸知するに止むべし決して殘存せる子宮腔部又は
 子宮下部と胎胞との間に指頭を侵入せしむべからず何
 こなれば之によりて容易に子宮口の損傷と産婦の疾病とを
 誘起することあればなり若し子宮口を通じて指觸し能は
 ざる他の諸部分を觸知すべき必要ある時に腔穹隆の上
 よりすべし此部は分娩の時には其上より觸知するに適する
 程菲薄なるものなればなり是より吾人は下向部即ち先
 進部の診察に移るべし
 頭部の先進し居ることは大なる硬き球狀物が子宮口の内に在
 ることを指頭に觸るくを以て容易なり頭部は或は顛頂部を

以て或は顔面部を以て出て来る顛頂部先進せるものに在り
ては顛門及顛頂部の縫合を認め得べし故に縫合及び大小
顛門を認むることは先進部の顛頂部なることを定むる
には最も必要なるものなり顔面部に就きては後節に詳に
説べし

既に顛頂部先進するここを知らば猶次の諸問題を定めざるべ
からず即ち

一顛頂部は骨盤内の何れの徑線上に在りや
二其高さは如何即ち骨盤の何れの部分に在りや

顛頂部が骨盤の横徑、斜徑、縦徑の三徑線の何れの上に在るやを
定むるには矢状縫合及び其經過を探らざるべからず何れの
縫合も之に觸れ試むるに兩骨の相接するを觸るゝのみなれ

ばこれによりて矢状縫合を定むることは甚だ困難なり故に
先づ縫合を見出して其兩端を探り試むべし縫合の一端に類
稜形の陥凹をなせる大顛門を觸れ他端に三個の骨の會合し
て成れる裂隙をなせる小顛門を觸るゝ時は此縫合は確に矢
状縫合なることを知るを得べし

一端に於て大顛門他端に於て鼻梁を觸知する時は之れ前額縫
合なり一端に小顛門他端は耳部を觸知する時は之れ冠状縫
合なり一端は小顛門他端は耳の後面に達すれば之れ後頭縫
合なり

既に矢状縫合を見出せば又其方向を知り隨て亦兒頭の何れの
徑線上に在るやを定め得べく且同時に顛門の所在に依りて
兒頭の前頭及後頭の位置と兒背の位置とを知り得べし

圖八十八第



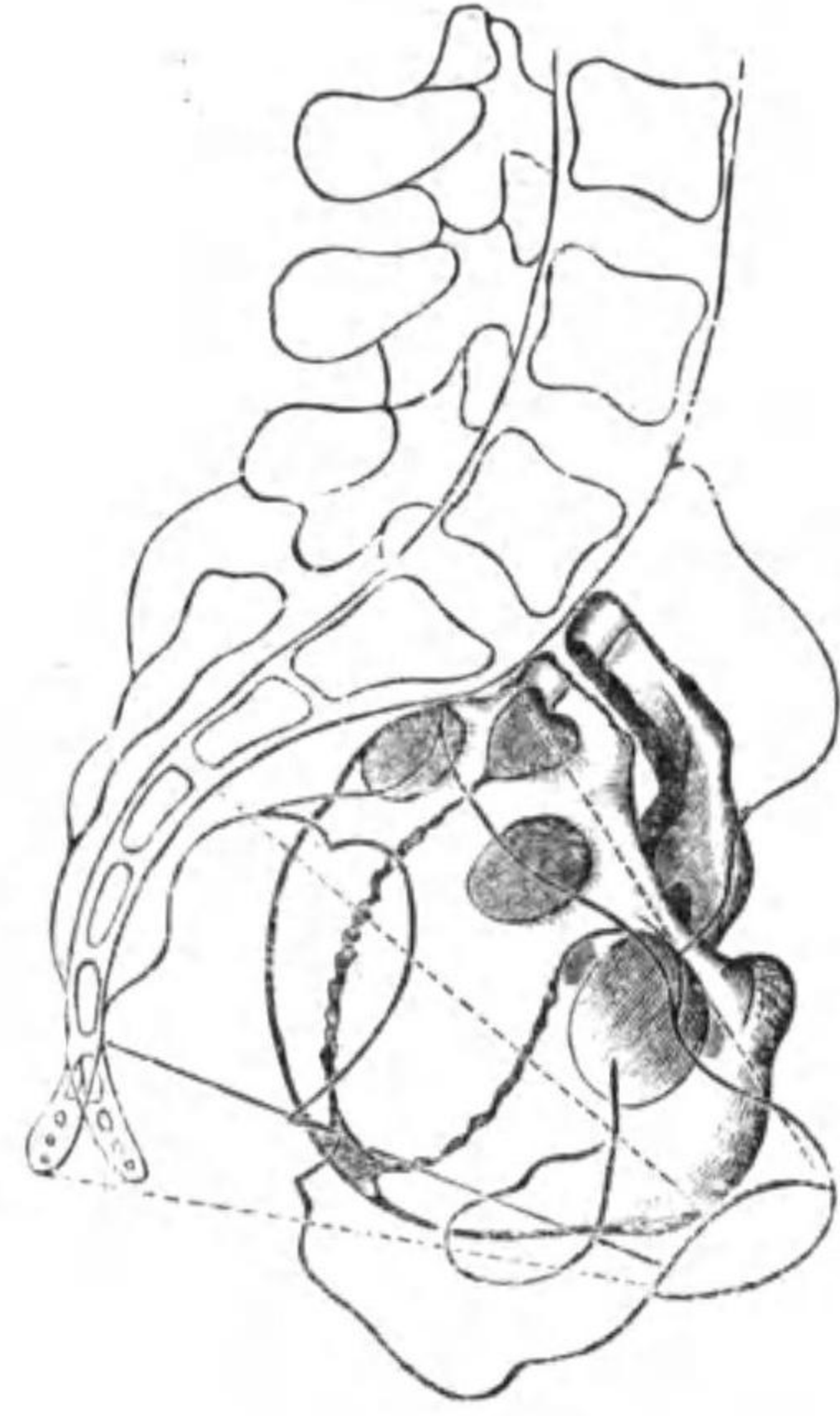
兒頭骨盤上口に在る状態を示す

述べたり此診査を丁寧になし且熟練を積む時は之に由りて
兒頭の高さをも推察し得べし然れども内診に依りては骨盤

次に兒頭の高さを定めざるべからず是れ分娩の何れの邊
まで進みしかを知るに必要なるものなり而して兒頭が
骨盤上口に在るや骨盤腔内に在るや將た骨盤下口に在るや

を定めざるべからず既に前節妊婦の診察法を述ぶるに際し外診によりて兒頭の骨盤内に入るや否やを定むるを得べきことを

圖九十八第



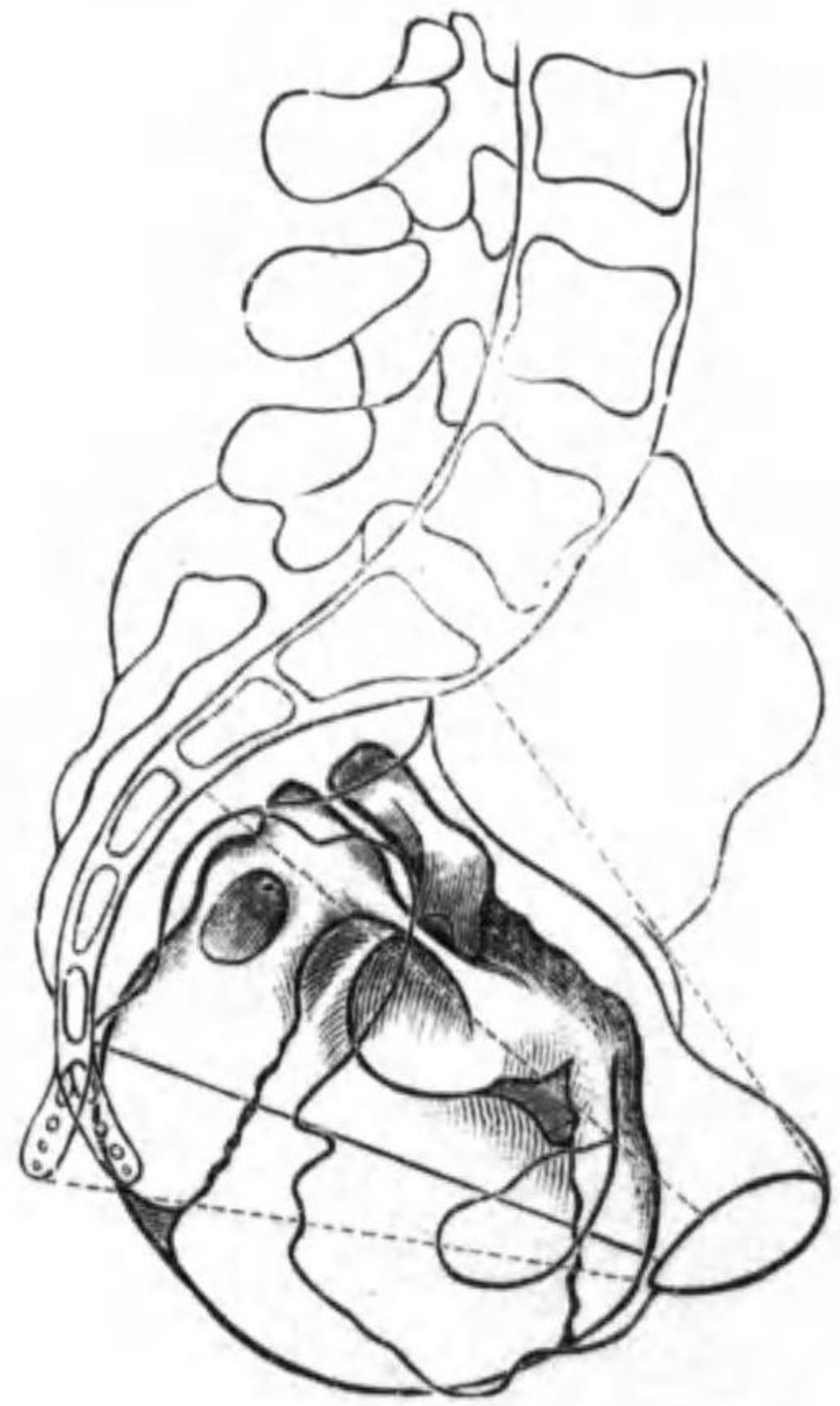
兒頭骨盤に在る状態を示す

腔の部分との關係によりて兒頭の高さを定むるなり即ち内
診して指頭直ちに薦骨岬に達するを得ば之れ兒頭尙骨盤

下向部の爲に指の薦骨岬に達するを妨げられ只薦骨岬の下
部に達し得るのみなれば兒頭は骨盤腔内に在り而して

上口の上にあるなり又指を兒頭の顛頂部に沿ひて彎曲しつゝ挿入する場合にのみ薦骨岬に達し得れば之れ兒頭は骨盤上口に在るなり兒頭の

此場合に於て兩側の坐骨棘を觸知し之を結合したる徑線の中に兒頭の先進部の一部弧形をなして觸るれば兒頭は骨盤



兒頭骨盤峽に在る状態を示す

こきは骨盤の前壁も後壁も觸知すること能はずして兒頭は既に陰裂の間に顯はる其他産瘤の存否及其大小と頭蓋

若し頭部が既に骨盤下口に在る盤峽に在りこす至れば兒頭は骨盤峽に在りこす兒頭によりて觸るこご能はざるに兩側の坐骨棘恰も潤に在りこす又

第十九圖

骨疊積の度合(後章を参照せよ)を檢し之によりて分娩經過に困難多かりしや否やを考ふべし

兒頭に容易に達し得るや否やによりて其高さを定むるは誤りなり何こなれば多くの場合に於ては兒頭には容易に達し得

るが如きも其位置は尙高きに在ることあればなり

急を要する場合には産婆は前述の順序を守りて診察するの暇なきことあり即ち招かれて産婦の傍に至れる時は分娩は終

りに近き會陰部膨隆し或は兒頭既に排臨或は撥露せることあればなり此際に産婆が悠々前述の尋問を始め次に外診に

移るは愚の極と云ふべし故に産婆は其状態に應じ速かに己れが手指及産婦の陰部を清潔にし而して尙暇あらば必要

なる用意と處置とをなすべし又斯る場合にても必要にして

第九十一圖



凹面は母體の右上腿内側に向ふを見る兒頭は其骨盤通過の間

第一後頭に於ける胎心音を聴取する處及體向と體勢を示す
 母の胎盤を上の線に於ける部分に最も明かに胎心音を聴く

近傍にあり終
 大顛門は初め
 は右方にあり
 て分婉の進む
 に從ひて後方
 に廻はり左側
 薦腸關節の近
 傍に至り更に
 進みて後方に
 廻はり薦骨陷

更に進めば前方に廻はり左側髖骨の閉鎖孔の近傍にあり終
 には猶前方に廻り左側耻骨下行枝の下に在り

第八十七節 後頭位の診断及其分婉經過

第一後頭位の場合に診察を行へば外診の際兒頭を骨盤上口の上觸れ胎兒の背面は母體の左方に向ひ子宮底に臀部あり母體の右側に其餘の小部分あり胎兒の心音は通常臍下左側に於て臍と左側腸骨前上棘との間に於て最も明に聴き得べし内診に當りては容易に小顛門を見出すべしこれ後頭部は最下方に位するによる小顛門は初めは左方にありて分婉

常に忘るべからざることは決して不潔なる手指を以て直接産婦又は初生兒に觸るべからざることなり若し手指を消毒するの違なき時は消毒せる一片の綿又は布片を取り出し之を手指に巻き附て後會陰保護其他の處置をなすべきものなり

産道の各部に適合せんが爲に變形せざるべからざるが故に種々なる體位、體向に由りて各特異の外見を呈す之に由りて胎兒が何れの體位、體向を取りて娩出したるかを推定するここを得べし而して後頭位にありては頤部より後頭

圖二十九第



後頭位に於て初生兒の頭蓋の延長したる形を示す

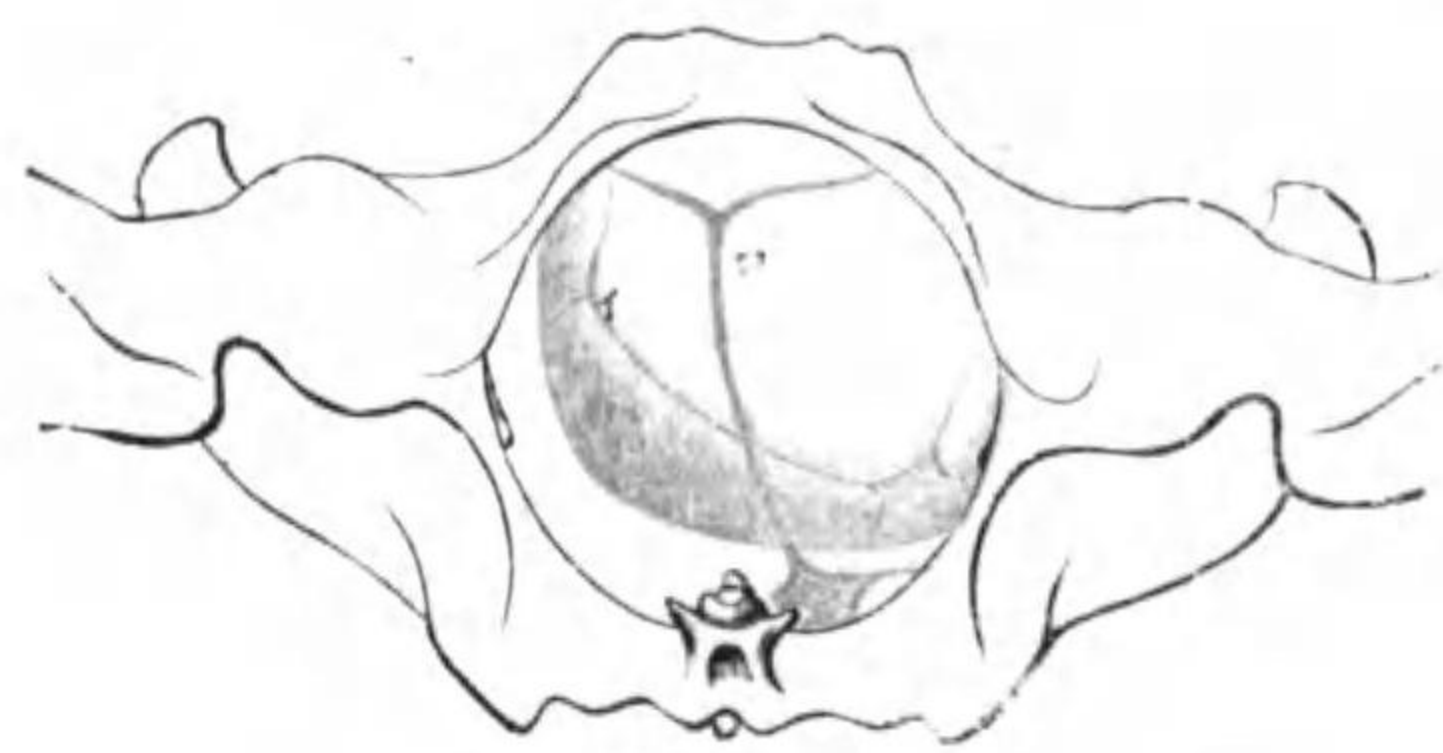
したる時は兒頭の下向部の最先進せる部分には所謂産瘤なるものを作る此産瘤は子宮口の兒頭に密接せる部分によりて兒頭の皮膚に於ける血液の還流を妨げらるゝか或は長く骨盤腔内に止るここによりて頭部の皮膚に血液中の成分滲

の方に引きたる線の方向に延長せらるゝこと圖に示す如し
 後兒頭の娩出までに長時間を要

出して生ずるものなり産瘤を生ずる部位は胎兒の位置によりて異なるものにして第一後頭位に在りては小顱門の近傍、右側顱頂骨の後方に在り、産瘤は兒頭の變形と共に二日の後に消失し普通の頭蓋の形となる其他各頭蓋骨は其縫合部に於て少しく疊積して頭蓋の周圍を小ならしめ骨盤腔の通過を容易ならしむ其變状は分娩の直後には見を得べし通常第一後頭位に於ては左顱頂骨は右顱頂骨の下に在り此産瘤及頭蓋骨の疊積の度合によりて分娩の難易を判断するここを得べく又此等の徴證を綿密に認むることは分娩の終りたる直後には分娩時の胎兒の位置を察し得べし然れども極めて容易に経過せる分娩の後には此等の變状を生ぜざることあり

兒頭は骨盤内に於て前節に述べたるが如く廻轉をなして
 恰かも骨盤腔に適當す骨盤上口に於ては兒頭は其最長徑
 を以て骨盤上口の横徑即ち骨盤上口に於ける最も長き徑線
 の上に位し骨盤腔に於ては其最も長き徑線即ち斜徑線に一
 致し骨盤下口に於ては兒頭の長徑は骨盤下口の最も長き徑
 線即ち其縦徑線と一致す後頭位に在りては兒頭は大畧其小
 斜徑線に相當する最小周圍を以て通過するが故に最容易に
 骨盤内を通過するを得るも兒頭若し後頭位にあらざる
 位置を取る時は後頭位に於けるよりも大なる頭蓋の周圍を
 以て産道を通つせざるを得ざるなり故に後頭位は分娩時に
 於ける抵抗最も少なく從て其經過平易にして危害少なく且
 此位置を以て分娩するもの多きが故に之を以て正規分娩

第三十九圖



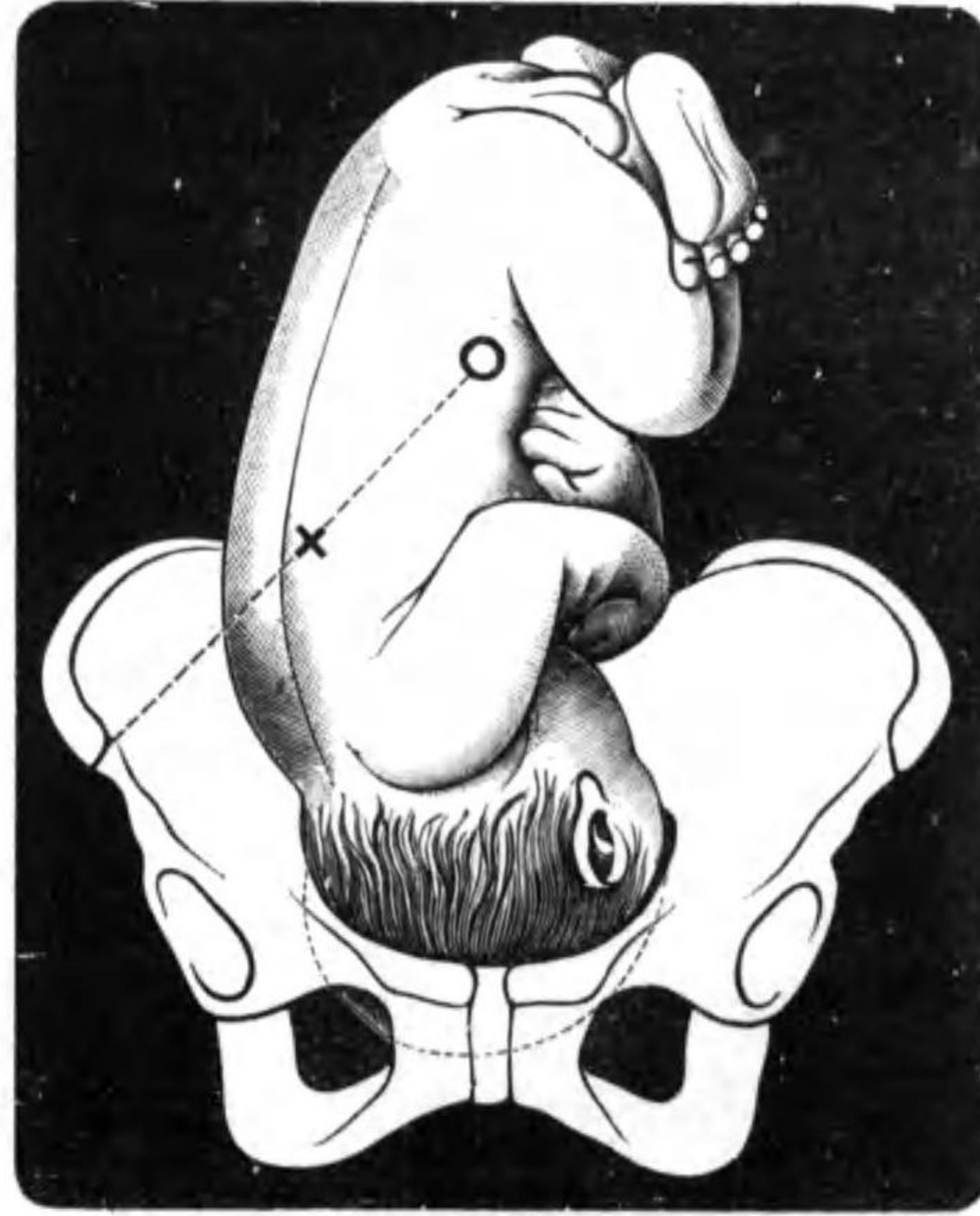
第二後頭の位を分る方を見たる想像圖

(イ) 胎頭骨盤入口に入る小兒頭蓋の位置を示す
 (ロ) 胎頭骨盤入口に入る小兒頭蓋の位置を示す

の位置をなす
 第二後頭位に於ける分娩の經過は第一後頭位に於けるこ
 同じくして只其體向の異なる爲に胎兒部分と産道との前後

即ち内診によれば兒頭骨盤上
 口に入る頃には後頭は右
 前に入る頃には矢状縫合は横
 徑線上にあり夫より更に骨
 盤濶の邊にまで進むときは
 後頭は右前方に前頭は左後

圖 四 十 九 第



方に廻轉し矢狀縫合は左斜徑線に一致す兒頭猶下降すれば
 後頭は耻骨縫合の下に前額は薦骨陷凹面の處にあり矢狀縫
 合は縱徑線上にあること既に前節に述べたるが如し

第二後
 頭位に ○は母體
 於ける の臍を示
 胎兒心 し×は通
 音聴取 常最も明
 の場處 かに心音
 と體向 を聞き得
 體勢と る處を示
 を示す

産瘤を生ず
 る時は左
 顛頂骨の
 後部小顛
 門の傍に
 あるを通
 常とす頭
 蓋骨の疊
 積は右顛

頂骨は左顛頂骨の下にあり兒頭の變形は第一後頭位のごき
 に同じ

外診に依りて兒頭は骨盤上口の處に兒背は右方に小部分は左
 方に臀部は上方子宮底部に觸る胎兒心音は臍と右側腸骨前
 上棘とを結合せる線の上に聴取するを通常とす

第八十八節 分娩經過の時間

分娩時間の長さは初産婦と經産婦とによりて異なり初産婦に
 在りては大凡九時間乃至十八時間平均十五時間なり其内最
 も多くの時は開口期に屬すべきものなり娩出期に殆ど二時
 間半後産期は大凡半時間なり
 經産婦に在りては概ね九時間を超えず平均七時間なり而して

娩出期に大約一時間後産期に大約半時間を要するを平均とす然れども往々経産婦は一二時間にて分娩を終るものあり分娩に要する時間は甚だ一定せざるものにして上に述べたる處も只其標準を示すのみにして初産婦にても二三時間にて分娩を終るものなしとせず然れども初産婦にして二十四時間以内に分娩を終るが如きものは決して非常に困難なる分娩とは云ひ難し且経産婦にても數日を費やすものあり三十歳以上にて初回の分娩を營むが如きもの(所謂高年の初産婦)は分娩に時を費すこと大なるを常とす

第八十九節 分娩の際に於ける産婆の處置

産婆若し産床に招かれたる時は猶豫なく招きに應ずべき義

務を有し産婦の貧富を論ぜず充分其務を盡すの覺悟あることを要すされど左の如き場合に其招聘を辭するは止むを得ざるなり

一 現に分娩の介助に従事し居る時

二 己れが取扱ひ居る褥婦の中發熱せるものありて業を執るべからざる時

産床に招かれたる時は一定の産婆用器械と藥品と繙帶材料とを携へ用に臨みて之を用うべし其内には必要なる器械を漏なく備へ且つ必ず清潔に取扱はざるべからず産婆の用うる諸器械は消毒し易き金屬製の函に容るゝを宜しとす若し布囊を用うる時は絶えず其保存と清潔とに注意すべし器械の内使用に堪へざるものあらば速に之を代へ綿

第九十五圖



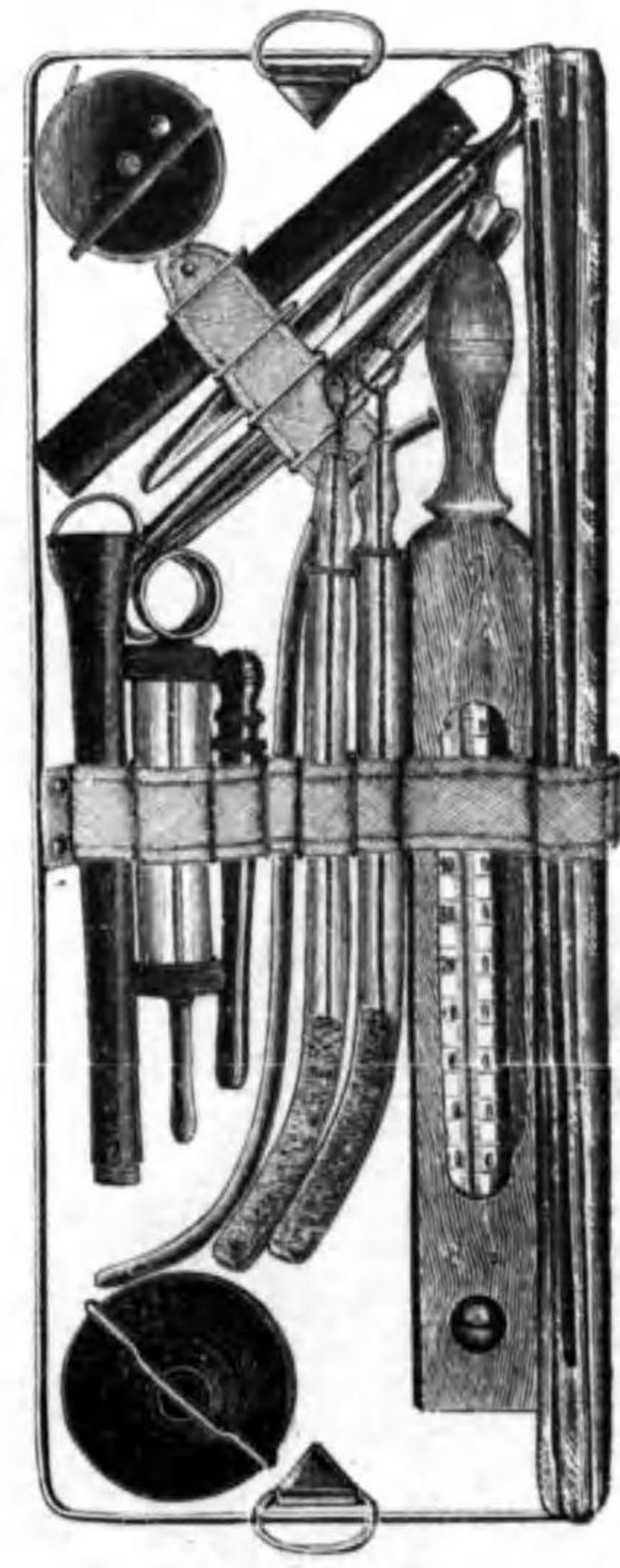
著者の
考案せ
る産婆
用具の
外被革
製を示
す

新しきものを用う
べし
産婆は其器械の容
器を産家に遺留
するここを許さ
ず介助終るや否や
必ず自ら携へて歸
宅すべし若し其内
に有害なるものあ
りて爲に不測の危
害を來すときは産
婆は其責を免る

紗綿の如きものは使用の後速に補ひ足すべし
新に器械を求めんと欲する時は最寄の醫師又は市醫郡醫等の
許に赴き問ひ合せ良き品を求むべし然らざれば用に堪へざ
るか或は甚だ不便なるものを得ることあり
最寄に薬舗なき時は産婆は消毒薬綿紗綿等を多量に貯へ置く
べし而して消毒薬は必ず容器に其名箋と其稀釋の度と
を記し一定の場所に貯へ其誤用を避くべし
器械を容るゝ函を清潔に保つ爲に不潔なるもの消毒せざるも
のなごを決して其内に入るべからず器械は使用後必ず直に
清潔に拭ひ消毒すべし若し己が分娩を取扱ひたる婦人後に
産褥熱に罹りたる時は器械函と器械とを完全嚴密に消毒す
るここを要す若し消毒に不便なる器械あらば必ず之を捨て

この能はざるものなればなり
 産婆用器械として備ふべきものは次の如し
 (一) 浣水器 内容は一乃至三リートルなるを宜しとす而してゴ

圖六十九第



(一其) 容内の具用婆産

- | | | | | | |
|--------|----|-----------|----|---------|----|
| 硝子製嘴管 | 二個 | 鑷帶剪刀 | 一個 | 氣管カテーテル | 一個 |
| 浣腸用嘴管 | 一個 | 剪刀 | 一個 | 卷尺 | 一個 |
| 小兒用浣腸器 | 一個 | ピンセット | 一個 | 聽診器 | 一個 |
| 體溫檢溫器 | 一個 | 金屬製カテーテル | 二個 | 爪鏝 | 一個 |
| 浴湯檢溫器 | 一個 | ネラトシカテーテル | 一個 | | |

△管三尺乃至五尺を附屬せしむべし
 (二) 腔洗滌用嘴管 硝子製のものは消毒に便なれば之を用うる
 を宜しとす然れども角、ゴム、金屬等にて造りたるものにても
 宜し金屬にて造りたるものは昇汞水を用うる時には使用に
 堪へず
 (三) 浣腸用嘴管 硝子製のものを宜しとすれども角製のものに
 ても可なり
 (四) 小兒用浣腸器
 (五) 聽診器
 (六) 檢溫器 は體温を測定するもの、外猶浴湯の温度を測るも
 のを具ふべし
 (七) カテーテル 金屬を以て製し婦人に適するものと其他に軟

かき弾力性を有するゴム製のもの(ネラトン式カテーテル)を備ふべし

(八) 臍帶剪刀

(九) 小兒氣管用カテーテル 直徑三乃至四密迷なる弾力性を有

圖七十九第

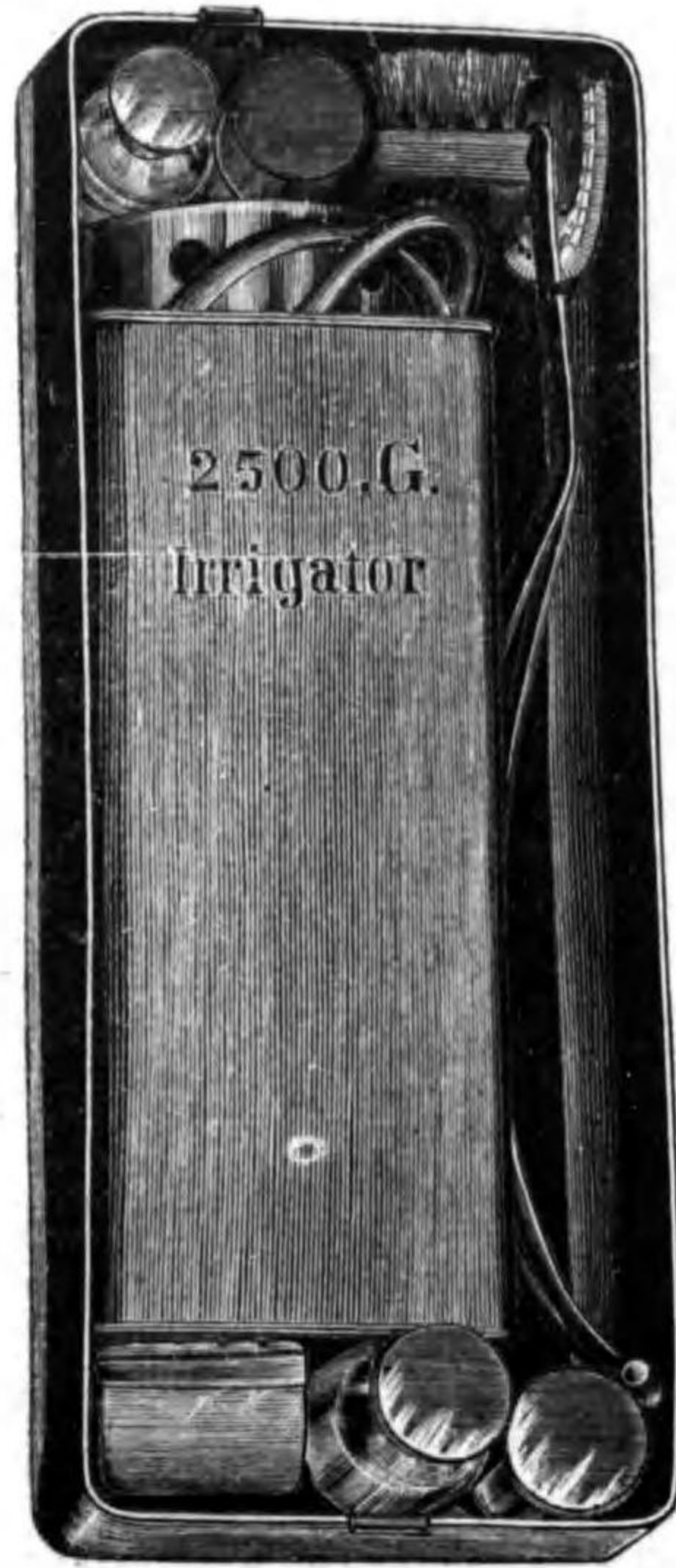


中島氏の氣管カテーテル

するものにて其尖端に開口するものなり若し適當なるものを得難きときはネラトン式カテーテルの相當の太さを有するものを尖端に近く側壁の孔の上部にて切り其斷端を丸めて用ゐる得べし醫學士中島襄吉氏の工夫せられたる氣管用カ

テールは第九十七圖に示せるが如くカテーテルの間に硝子製の膨れたる部分を夾み吸引したる粘液等を吸込まざる

圖八十九第



(二其) 容内の具用婆産

二五〇〇瓦入洗水器
繃帶材料容器
臍帶結紮絲容器
ゴム管
爪刷毛

個 個 個 個 個

石鹼
硝子瓶
點眼裝置
ワセリン容器
骨盤計

個 個 個 個 個

液量器
全容器に約五千瓦を入れ其傍らに度目を盛り凡其量を知ることを得せしむ

ここを圖りたるものにて實用上甚便利なり

(十) 臍帶結紮に用うる絲又は紐及び其容器

(十一) 爪刷毛及び爪鑷

(十二) 石鹼及び其容器

(十三) 消毒せる繻帶材料(綿紗、綿、臍、繻帶等)及其容器

(十四) リゾール又は石炭酸

(十五) ホフマン氏液

(十六) 二% 即ち五十倍硝酸銀水及點眼裝置

(十七) 等分亞鉛花澱粉

(十八) 液量器

(十九) 骨盤計 之を缺ここを得るも携帶する方を便利なりとす

(二十) 卷尺(二メートルのもの)

(廿一) 剪刀 種々應用の場合あれば之を携ふべし

(廿二) ピンセット

(廿三) 止血鉗子 二個

(廿四) ゴム布 大巾にて三尺乃至四尺あれば可なり或は桐油紙

を以て代用し得べし

(廿五) 手術衣

(廿六) 手拭

大抵は此等のものを備ふれば可なり而して之を容るゝ處の器

は用に臨みて器械を消毒し又消毒したるものを入るゝ處の

皿さなし得べく製作するを便なりとす

著者の考案せるものは圖の如きものにして消毒携帶に便にす

るを目的とせり其他諸氏の考案に成るもの多種あり

産婆は産床に到ればまづ此婦人の分娩は既に始まれるや否や且其分娩は何れの邊まで進めるかを確め次に正規の分娩を期し得べきや否やを判断すべし此等の點を明にするには周到なる診察をなすことを要す即ち産婦の訴ふる處の疼痛が陣痛なりや又此疼痛が規則正しく起るや否やを吟味すべし次に外診を行ひ若し必要と認むる時は内診をも行ふべし

手指の消毒の爲に産婆は金盥又は鉢の如き器の中に前に述べたるが如き温度を有する清水をこり他の器の中に三十倍の石炭酸水又は百倍のリゾール水を容るべし又消毒法は既に前に述べたる方法によりて診察前に行ふべし産婆自ら産婦の分娩始まれること及分娩が如何ほど迄進みたるかを確めた

る上は産婦の傍を離れず分娩に必要な準備を残りなく整ふべし又産婆は折を見て産室に充つべき室を求めむべし其室は靜穩にして光線の射入よき階上にあらざる室を宜とす産婆は家人の中より沈着にして用に立つべき婦人一人を選び室内に於て用を足さしむるの外無用の人は悉く室内に入らしむべからず室は空氣の流通を能くし適宜攝氏二十度位華氏ならば七十度位に温むるを宜とす

此に於て産床を構造すべし産床は三方より近寄り得べき様にし藁布團又は通常の臥褥を用ゐる其上にゴム布及敷布を布く尚産婆は適量の殺菌水及び多量の沸湯を用意せしめ消毒し初生児の沐浴又は湯婆等に用うるに差支なからしむべし若し暇あらば産婦に全身浴をこらしむべし産婦の衣服は成る

べく寛濶にして清潔なるものを用ゐしめ産婦に排尿及灌腸を施して膀胱及直腸を空虚となすべし其他必要なる器械類、臍帶結紮用の紐、消毒薬、繃帶材料等を備へ尙産婦の興奮劑として葡萄酒或は他の酒類を用意すべし

産婆は常に其産婦の看護を擔任する時必ず毎二時に一回検温器を以て體温を測ることに習熟すべし又産婆は浴槽、臥床及凡て嬰兒に必要な用意を忘るべからず

産婆は診察によりて分娩の経過正規なるべしと考へたる時は自ら分娩の世話を擔任して可なり若し正規の分娩にても醫師を招かんせば産婆は其招聘に故障を云ふことなく寧ろ之を歓迎すべし何となれば正規の分娩なりと思ひたる時にも如何なる急變の起りて醫師を要することなしと限らず而

して産婆は豫め之を知り得ざることあればなり故に産床に於て醫師と共に分娩を介助するときは若し産婦に急變起ることも直ちに手當をなし得る故に産婆に取りては甚だ利あることなり若し異常の起らんとするか或は既に起りたるときは時期を失はず速に醫師を招かしむべし

分娩の第一期即ち開口期の初めには産婦は室内を歩行するも差支なし而して陣痛來る時は何か堅固なるものにたよらん

とするものなれば其心して之を助くべし

産婦若し陣痛發作に際し努責する時は之を禁すべし陣痛強烈にして荐りに續きて發作し疼痛益加はる時は同時に血液を含める粘液漏出するものなり之を期として産婆は産婦を産床に伴ふ若し然らざるも陣痛強烈なれば産床に就かし

むべし而して胎胞破裂の後産婆は直に一度内診をなすべし而して其時には分娩経過に異常なきや、兒頭骨盤内に正しく進み來れるや、小部分或は臍帶が垂脱し居らざるやを確むべし然れども破水の後にても引續き胎兒心音に少しも異常なく母體にも異常なくば内診せざるを宜しとす其他の場合に於ても内診は出來得る限り之を避くべし

す
分娩経過中度々胎兒の心音を聽くべし殊に破水の後は毎十五分又は毎二十分位に之を聽取し其性質に異常なきや、其速に異常なきやを檢すべし是れ殆ど胎兒の生死を判斷すべき唯一の根據なればなり又第二期即ち娩出期の末に至

欠

欠

處なれば學び得たる方法を應用する際には常に注意して充
分なる熟練に達することを期せざるべからず
仰臥位に於て會陰保護を行ふには先づ産婦の臀部の下に枕
を挿入し容易に會陰部に手の届く様にすべし脚は股關節及
膝關節にて曲げ兩方に開かしむ産婆は床縁の右側に立ち顔
は産婦の顔と相對し右手は右腿の下より會陰部に送り拇指
を陰唇右側に他の四指を左側に手掌を會陰の上に拇指と示
指との間に於て陰脣繫帶をよく見得る様に置べし(即ち陰
脣繫帶の縁と指裂の縁とは並行して約一仙迷位を離すべし)
然らざれば會陰の如何程伸びたるかを知ることを得ざるな
り而して左手を上腿の上より送り四指を揃へて兒頭の上に
置き或は拇指と示指とを開きて陰脣の上に置き兒頭の撥露

せんごする時會陰保護術を始む陣痛が兒頭を壓出せんごす
 る時之れと同時に兩手を用ゐて之に反對に兒頭を壓し返す
 べし即ち會陰部の處に在る手に小指球の部分に充分力を用
 る拇指球の方に向ひて少しく力を用ゐることを減じ之によ
 りて兒頭を前方に滑轉せしめ同時に會陰部の強き膨隆を防
 ぐ即ち兒頭を前上方に向ひて娩出力の強さに應じて徐か
 に壓するなり而して既に兒頭が最大なる周圍を以て出でん
 ごする時には産婦に努責するここを禁じ口を開きて深
 呼吸をふさしむへし抑も産婆が會陰保護を行ふ目的は陣
 痛時に急に兒頭の娩出するを防ぐにあれば只單に兒頭を
 進ましめざるにはあらずして適度に進行せしめざるべ
 からず此時期に於ては陣痛の間歇時には産婦をして軽く努

欠

欠

りて増大するこゝ多し之れ後方に在る肩胛部の娩出に際し
會陰は再び伸長せらるゝが故なり此時兒頭娩出の時に於け
るゝ同じき注意を以て會陰の保護を行ふときは新に裂傷を
生じ或は小なる裂傷を増大せしむることなきを常とす
兒頭の娩出するや否や産婆は必ず胎兒の口及鼻を拭ひ羊水
血液、粘液等を吸入せしめざる様注意すべし殊に軀幹の
娩出と共に羊水の全部流出する時に注意すべし
又嬰兒の頸部に臍帯の纏絡あることは五六回の分娩に一回
位の割合なれば忘るゝこゝなく之を検すべし斯る事なきを
見ば肩部の撥露するまでは次の陣痛に注意すべし若し頸部
に臍帯纏絡せば之を弛め且兒頭を超えて外すこゝを試る
べし然れども臍帯緊張する時は之を外すこゝを得ずして纏

絡せる臍帶は次に軀幹の娩出するに際し胎盤の附着せる處を強く引きて離斷し或は出血を起すの虞れあれば産婆は剪刀を用ゐて臍帶を切斷すべし之をなすには先づ臍帶を大凡二指横徑の距離を取りて二箇所にて結紮したる後に切斷すべし或は先きに結紮をなさずして切斷したる臍帶の兩端を
 持ち居るか止血鉗子出血を止むる爲に特に作られたる器械なりにて挟み置きて嬰兒の娩出後直にまづ兒體に附着し居る方の臍帶を結紮し次に他の端を結紮すべし之れ成るべく
 嬰兒の血液を失はざらんが爲なり臍帶の切斷を行ふ際には充分注意して母子共に損傷を受けしめざる様にすべし即ち臍帶を少しく扛げ其下に剪刀の一の刃を挿入し初生兒を傷けざらんが爲に剪刀の全部を左手の中指と示指とにて掩ひ

然る後靜に臍帶を切斷するなり

兒頭娩出したる後肩胛部の娩出甚だ遅延し

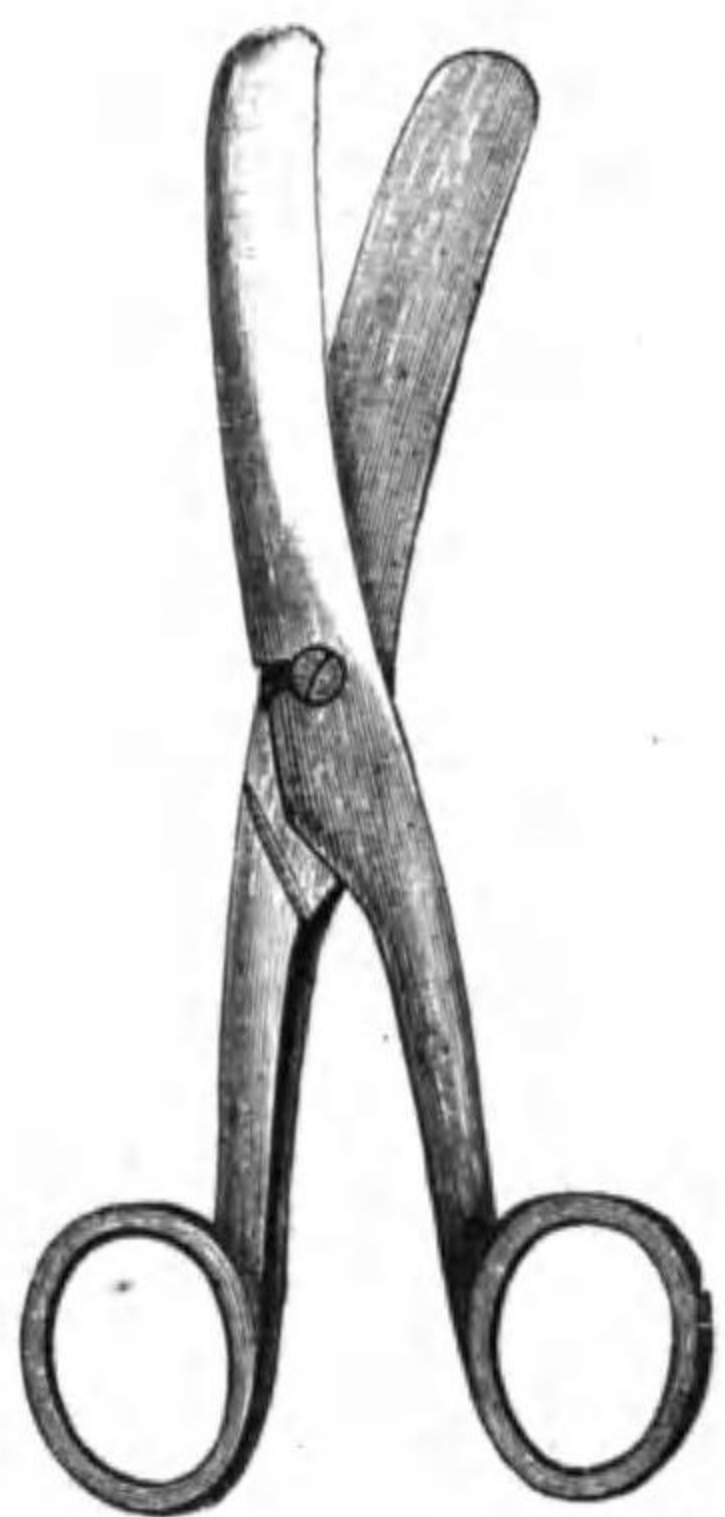
甚だしく紫赤色となり危険の恐ありと認むる時は先づ子宮底を環狀に摩擦して陣痛を促し十分に收縮せる子宮底に壓を加へ産婦にも努責せしめて娩出を謀るべし若し之れに依りて目的を達せざるときは徐かに一手の示指を會陰部より腔口に送り後方に在る腋窩に掛け徐かに會陰に向て引きつゝ下方に引く然る時は前方に在る肩先づ娩出す兩肩共に娩出すれば太抵次の陣痛にて軀幹娩出するものなり若し猶軀幹の娩出遅延せば背の方より右の腋窩には左の示指左の腋窩には右の示指をかけ徐かに前方に回轉しつゝ下方に引くべし肩胛娩出せば軀幹の娩出は殆ど介助を要せずして容易

に經過す

第九十一節 初生兒臍帶の剪斷

初生兒の生るゝや否や母の兩脚の間に横たへ臍帶の緊張せざる様にしその口鼻等を拭ひ且つ此等を壓迫することなくして自由に呼吸を營み得るやうに注意すべし而して産婆は初生兒が生活し居り且規則正しく呼吸し居るや否やを確かめし初生兒の高聲に泣くは正しく呼吸の起りたる確かなる徴なり若し啼泣の不充分なるか全く啼泣せざる時は之を泣かしむることを試むべきも呼吸適度なる時には臍帶脈搏の存在する間は其儘になし置きて之を剪斷すべからず其間に必ず左の事柄に注意すべし

圖一百第



圖の刀剪帶臍

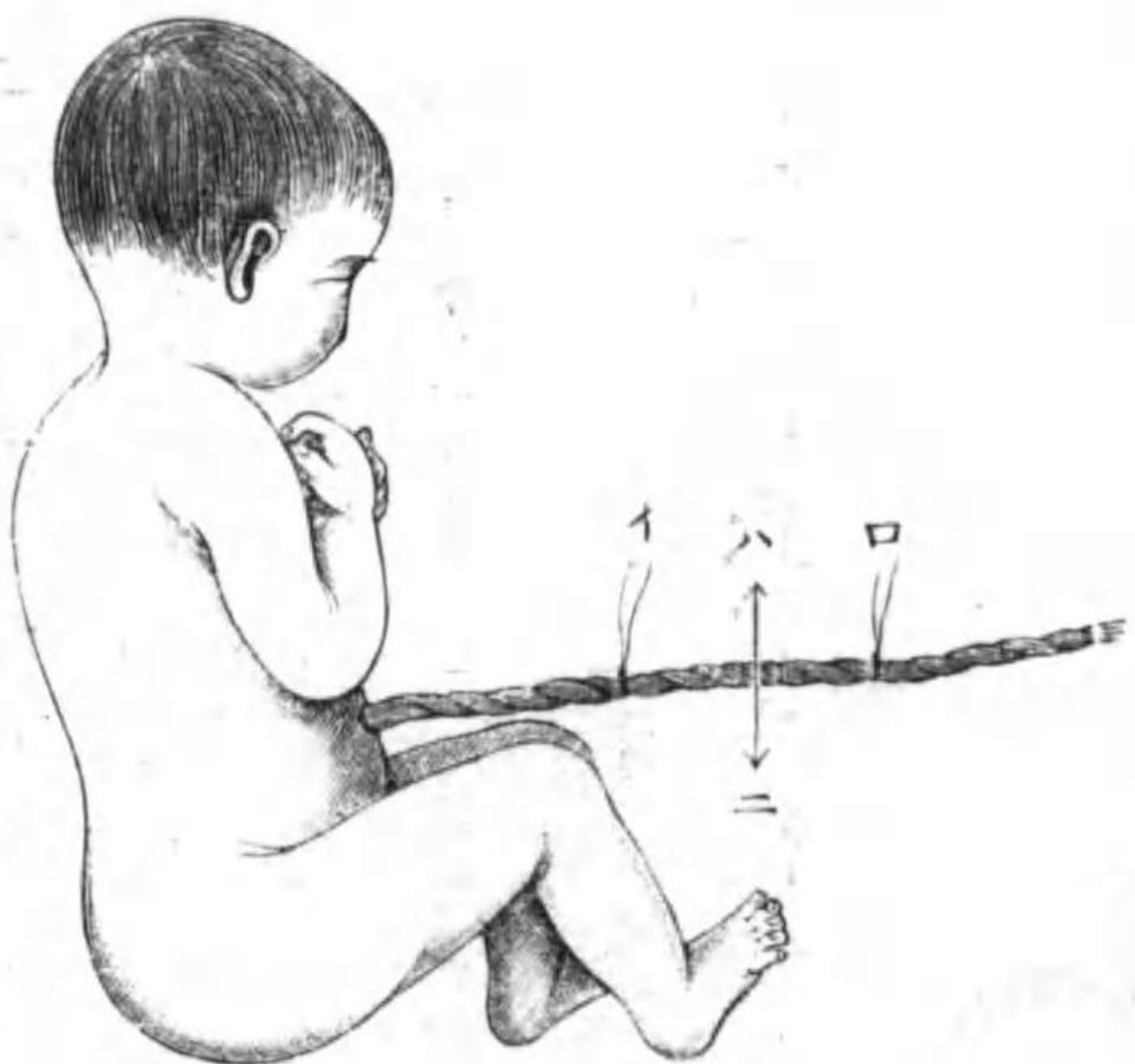
(一) 子宮の上に手を貼して其能く收縮せるや否やを確かめ子宮底の高さを定め且之と同時に子宮内に第二の胎兒の存するや否やを確かむべし

(二) 母體より出血なきや否や若し出血あらば其何れよりするかを検し若し多量に出血する場合には臍帶動脈の搏動の止むを待つことなく速に臍帶を剪斷し然る

後止血の方法を圖るべし

異常なきときは臍帶動脈の脈搏止むを俟ちて臍帶を剪斷

圖 二 百 第



す示を様るす断剪を帶臍

(イ)は臍
輪より二
指横徑を
距りたる
處なり即
ち
(イロ)の
二箇處に
て結紮し
其の間の
(ハニ)の
處にて剪
刀を用ひ
て切るな
り

すべし即ち臍より大凡二指横徑を距りたる處にて丈夫にし
て柔かなる紐又は麻糸にて臍帯を結紮すべし其際産婆は次
の諸項に注意すべし結紮前に兩手の拇指と示指とを以て結
紮すべき場所に附着
せる膠様質を成べく
擦り去るべし之は結
紮を堅くし後に至り
て弛まざる爲にする
なり其上尙念を入れ
一度結紮したる後更
に其紐の兩端を臍帯
の周圍に回はして再

び結び玉を作るべし一の結紮成らば更に之れより胎盤の方
に殆んど二指横徑を距てく同様の方法を以て第二の結紮を
なすべし然る後兩結紮點の間を左手にて臍帯を被ひて母兒
の損傷と血液の飛散とを防ぎ臍帯剪刀を以て切斷すべし是
に於て小兒を温き襁褓又はフラネルの中に包み安全なる
場所に置き絶えず臍帯の斷端より出血せざるや否や初
生兒は正しく呼吸し居るや否やに注意すべし

第九十二節 後産期に於ける産婆の處置

此時期に於て産婆のなすべき務は一手を子宮底部に當てく子
宮收縮の状態を監視するこゝとなり若し子宮能く收縮せ
る時は硬く觸れれ子宮底は臍の高さに在り若し柔軟となり膨

大する時は收縮不良なるものぞ知るべし其他外陰部の前に
 消毒せる綿を當て之を押へ置くべし之によりて小き傷を被
 ひ以て小出血を止め且出血の多少をも知ることを得るなり
 而して産婦の兩脚は延ばして床上に横へしむるも可なり
 産婆は後産期に於ける子宮の收縮即ち後産期陣痛の來るや
 否やに注意すべし産婦は胎兒娩出の後數分を経て陣痛と共
 に少量の血液が流出するを感ずべし此陣痛發作は第二期の
 終りの如く強烈ならずして間歇も亦長し而して後産娩出の
 爲には必要なるものなれば只靜かに其有様を觀察すべし然
 れども若し子宮柔軟となり又は膨大せるを認むる時は子宮
 底を環狀に摩擦し其收縮を促すべし
 數回反復せる陣痛にて胎盤は全く剝離し腔まで降り此部に充

塞し往々外陰部に膨隆するを見ることあり此時は子宮の上
 に軽く壓を加ふれば胎盤は外陰部へ壓し出さるべし胎盤娩
 出せば兩手を以て之を受け之を或一定の方向に振り回せ
 ば胎盤の上を被ひたる卵膜は振れて索狀となり徐々に滑り
 出づべし若し切りに之を牽き出さんごすれば却て卵膜を破
 り之を子宮内に残すの虞あり故に決して引き出すことなく
 只振轉するのみなるを宜しとす又未だ娩出せざる後産を早
 く出さんごして臍帶を牽くことば堅く禁ずる處なり之
 によりて容易に卵膜を破り又は子宮内に卵膜の一部或は胎
 盤組織を残留せしめ或は臍帶を離斷し出血を來し或は子宮
 の翻轉を來すの虞れあればなり往々強き後産期陣痛あるに
 も關らず胎盤の娩出せざることあり其時には先づ膀胱の充

第 百 三 圖



クレデ氏の方法によりて胎盤を押し出す様を示す

り大抵の場合には此方法によりて後産を終らしめ得るものなり此法をクレデ

氏の法と云ふ
 後産期に過度の出血
 あるか前に述たる
 が如く胎盤の壓出
 を試むるも娩出せ
 ざるごきは醫師を
 招かしむべし
 娩出せる後産は室外
 に出し冷かなる場
 所に置かしむべし

満せるや否やを検し若し之あらば導尿を行ひて猶暫く後産の娩出を監視すべし若し胎児分娩より大凡一時間を経たる後に猶後産の娩出なきごきには陣痛發作の有様を観察し其發作と共に外部より子宮を押し後産を除去せんことを試むるも可なり即ち拇指を子宮の前面に他の四指を其後面に置ききて腹壁より子宮底を攪み前後兩壁を壓しつけ同時に全子宮を後下方に即ち骨盤軸の方向に壓すべし然れども此壓は陣痛發作時に於てのみ加ふべきことを忘るべからず故に若し陣痛弱き時は壓出するに先ちて子宮底を環狀に摩擦し其收縮を促がし充分に收縮の起るを待ちて上に述べたる方法に従ひて壓出を謀るべし然らざれば子宮翻轉又は子宮の一部痙攣等の如き不幸なる出來事に遭遇することあればな

而して産婆は褥婦を手當し終り其安全なるを確めたる後に
 後産が完全に娩出したるや否やを検査すべし後産の完
 全なることは胎盤に缺損なきこと、卵膜の破綻せる口のみ
 にて其外には缺損せる部分なきこと、由りて知る若し之
 を検査して完全なること明かならざるか或は醫師の來るを
 待つべき場合などには毎に之を醫師の検査に供ふべし
 卵の總ての部分即ち胎兒、卵膜、胎盤、臍帶、娩出し終れば分娩は終
 りを告ぐるものなり然れども産婆の職務は此時に終るもの
 にあらずして分娩後尙一三時間、褥婦の傍に在らざる
 べからず何となれば此時に於て危険なる出血なきを保せず
 又褥婦は不安にして尙切に産婆の補助を乞ふことあるもの
 なればなり分娩が夜中に起りたる時にも必要に應じ産婆は

徹夜産婦の傍に在らざるべからず

第九十三節 分娩後の取扱法

後産の娩出したる後、尙子宮の收縮完全なるや否やを確む
 べし、收縮充分なる時には耻骨縫合の上方に於て子宮を硬き
 球状のものとして觸る斯る場合に産婦又は初生兒に他の介
 助を要するときは確なる助手又は家人に委任して子宮の收
 縮状態を監視せしむるも可なり然れども其硬き球状のもの
 柔軟なるを覺えたる時は速かに之を告げしむべし然らざ
 れば不意に大出血等を來すの危険ありとす若し收縮佳良に
 して危険なくば初生兒の沐浴をなさしめ後産凝血及汚染し
 たる下敷等を取り片附くべし其場合には成るべく褥婦を煩

はすこごなく且褥婦自ら身體を動かさざる様注意すべし爰
 に於て産婆は微温の三十倍石炭酸水又は百倍リゾール水に
 浸したる綿又は布片にて外陰部を拭ひたる後乾燥したる清
 潔なる綿又は布片にて之を拭ひ乾すべし其際外陰部會陰部
 の裂傷等の有無を検し若し之あらば醫師を招聘するの期を
 失ふべからず外陰部を拭ひ終れば股より下腹部を拭ひ外陰
 部には消毒せる綿又は綿紗を當て置くべし此等の事終れば
 褥婦には足を伸して靜に臥さしめ産婆は後産の終りてより
 猶二三時間子宮の收縮を監視し出血の起るや否やを注意す
 べし
 古へは此時期に褥婦に睡眠すること禁じたり之れ褥婦と共に
 産婆も亦眠りに陥ることありて若し斯かる際に出血ある

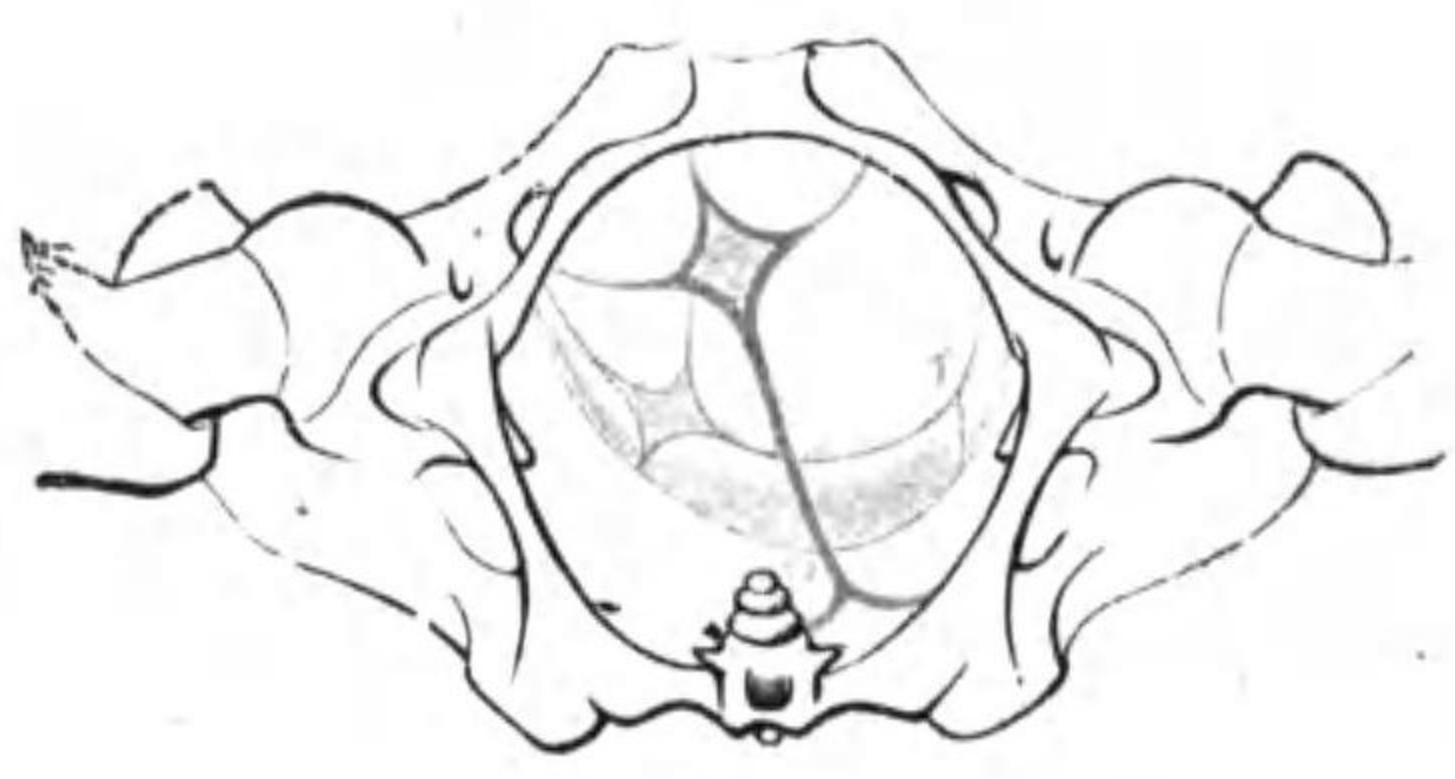
も之を知らずして適當なる時期に適當なる處置を行ふこと
 能はずして大なる危険に陥るの虞あるを以てなりされど産
 婆が誠實に其職務を盡す時には褥婦の睡眠することは少し
 も妨げなきことにして褥婦は疲勞より回復する爲には有利
 なることなり分娩後二三時間を經過し且つ萬事整頓し異常
 の状態を認めざることは産婆は褥婦の許を辭し去るを得べ
 し而して其間猶小兒の看護を怠るべからず
 最後に注意を加へんと欲することは初生兒分娩の後屢
 其處置にのみ心を奪はれ母體の處置を顧みざることあり
 りて子宮收縮の不良なるに心附かずして瀕死の危険症
 状を起すに至ることあれば初生兒と共に母體の處置を
 忽にすべからず

第九十四節 後頭位分娩の違例

兒頭は其下降に際し往々前述のものご全く反對の廻轉をなす
ごあり即ち兒頭骨盤上口に入りて後後頭は漸次前方
に向て廻轉するを常とするに後方に向ひて廻轉するこ
ごあり其經過次の如し

第一後頭位よりするものに於ては兒頭は通例の如く骨盤上口
の横徑線に入り來り後頭は左方に前額は右方に在り分娩の
進むに従ひて兒頭は漸次下降し後頭は後方に向ひて廻轉し
左側薦腸關節の近傍に在り前額は右前方即ち右側閉鎖孔の
近傍に在りて矢狀縫合は左斜徑線(第二斜徑線)上に在り次に

第四百圖

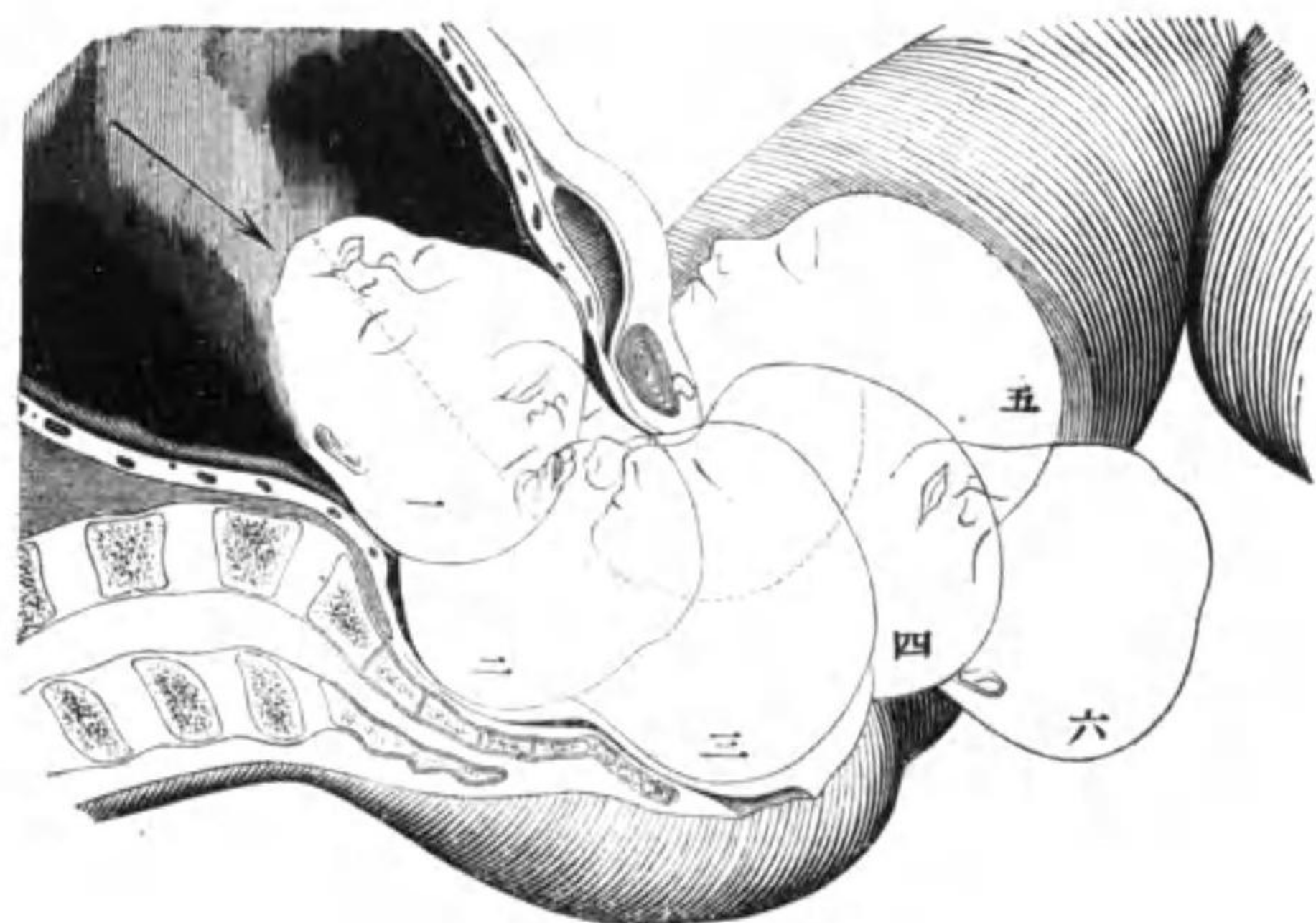


第一前頭位の分娩を下方より見たる想像圖
(イ)及び(ロ)の關係は第八十六圖第九十三圖に於けるに同じ

後頭は更に後方に廻轉し薦骨陷凹面上に前額は耻骨縫合
の後下方に矢狀縫合は

後頭は後方に前頭は前方に向ひたるまゝにて生るゝごあり然れども時として

圖五百第



第一前頭位に於ける頭の産道を通す過る状態を示す

り然る時は前額は耻骨弓の部に壓定せられ先づ顛頂部に後頭部は會陰を滑りて娩出し然る後前額は耻骨弓部を離れて娩出し顔面は耻骨縫合の下より娩出す是れ即ち第一前頭位なり即ち第四頭蓋位又は第一前頭位と稱せらるるものなり

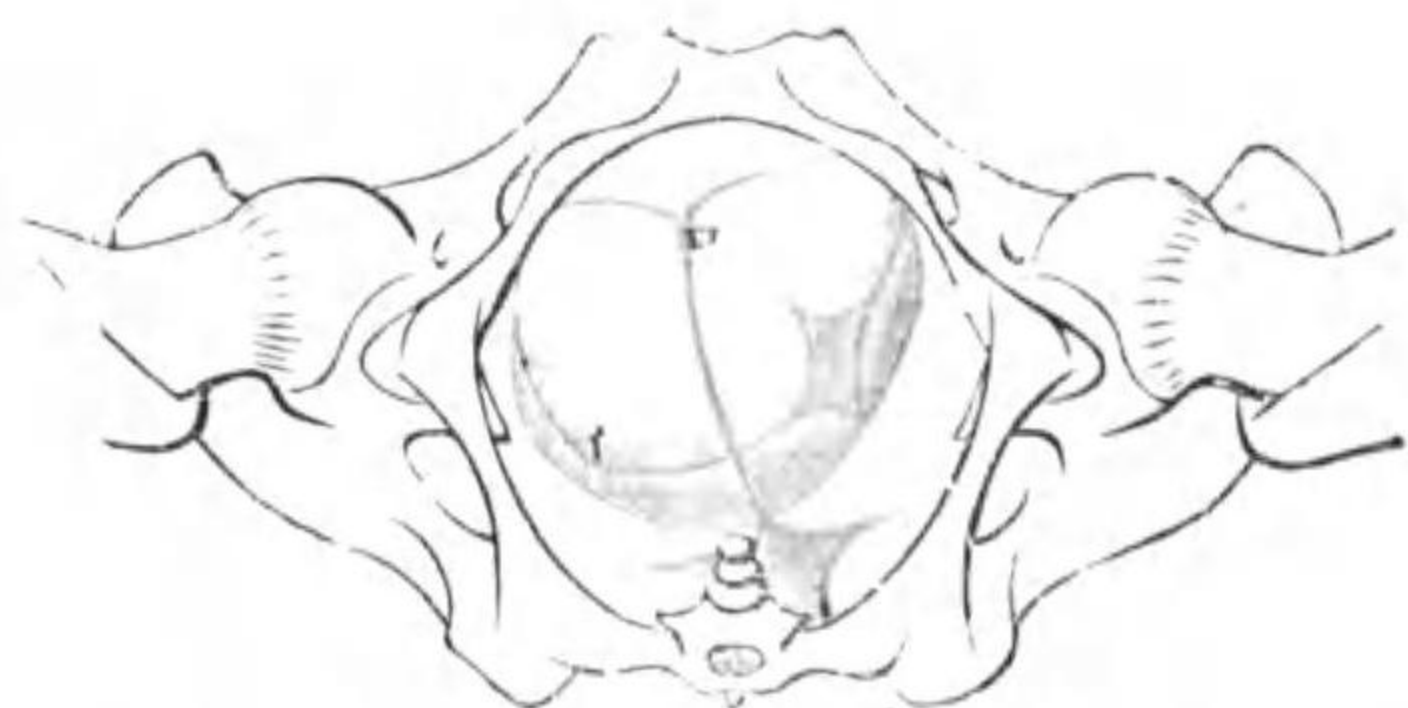
外診に依りて此位置を診定すべき確かなる標準は少

圖六百第



前頭位に於ける生て起る由の形蓋初り分

圖七百第



第二前頭位に於ける過る状態を示す

細き骨の口頭に於ける状態を示す

し其状態は第一後頭位と異なる處なくして只兒背が後方に偏せる爲に前方に廻轉すべき後頭が反對に後方に廻轉する

ここあるを知るのみ之に反して内診によりて吾人が後頭位を大に異なりと感ずる處のものは甚容易に大顛門の甚しく下降せるを觸れ得れども小顛門の位置は高くして骨盤上口に於ても薦骨陷凹面に於ても見出し難きことなり

此位置に於ける分娩の際産婆は之を介助するごとく中々困難
 なり之れ兒頭は後頭位に於けるよりも大なる周圍を以て陰
 裂より出づる爲に會陰部甚だしく膨隆し其部分に裂傷を生
 じ易きを以てなり故に會陰の保護には一層注意すべし
 此位置にて分娩せるとき産瘤を生ずれば大顛門の右側に於て
 之れを見る兒頭の變形は圖に示すが如し
第一前頭位は第二後頭位の廻轉の異常と見做し得るものな
 り即ち第三頭蓋位又は第二前顛位と稱せらる其廻轉の様
 は前に述べたる第一前頭位と比較して考ふれば容易に明瞭
 なるべし
 故に第一及び第二の前頭位は其固有の經過をこりて骨盤下口
 に迄來るも多くは強き廻轉をなして第一前頭位は第一後頭

位に第二前頭位は第二後頭位に移りて娩出せられ其然らざ
 るものは固有の位置を以て娩出するなり後頭位の分娩に於
 て尙違例となすべきものは兒頭は骨盤下口に至る迄廻轉を
 なすことなくして下降し兒頭の矢状縫合は骨盤上口より其
 下口に至るまで横徑線に一致して降るが如き場合なり此場
 合には常に醫師の助を要するものなり

第九十五節 顔面位

後頭位に在りては兒頭は其最小なる周圍を以て骨盤内を通過
 するが故に分娩は最も容易に經過すべきなり然れども若し
 兒頭が他の部分を先進せしめて生れ出る時即ち或は前額を
 先進せしめ或は顔面を先進せしめて生れ出る時は兒頭に於

圖八百第

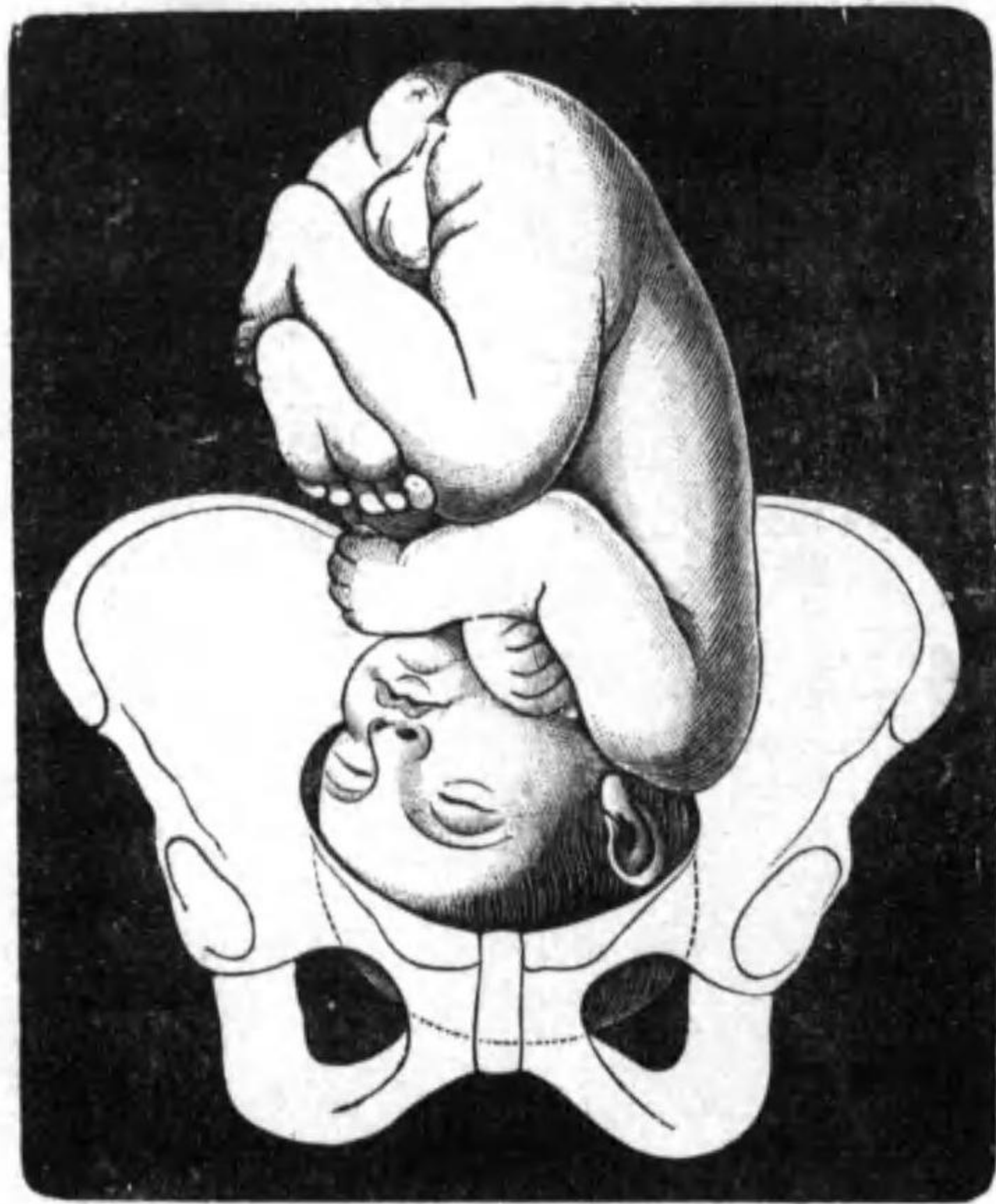


す示を勢體の位頭後

ける甚大なる徑線並に甚大なる周圍を以て産道の内を通過せざるべからず之が爲に分娩は著く困難となり兒頭は大なる變形をなすも猶屢分娩の阻止せらるることありて不幸なる障害を生じ易きものなり故に産婆若し前額位又は顔面位なることを認めなば直ちに異常分娩として取扱ひ産科醫を招くことを忘るべからず

顔面位に於ては頤部

圖九百第



す示を勢體の位頭前

此等の位置に於て頤部が胸壁より離るることによりて先進部を異にするも同一なりと雖も只其度合によりて先進部を異にする

は甚だしく胸より離るるものにして頤部の胸より離るること顔面位に於けるよりも少きときは前額は最も先進し前額位となる頤部が只少しく胸より離れたるのみなる時は前額頂部先進して前額位となる

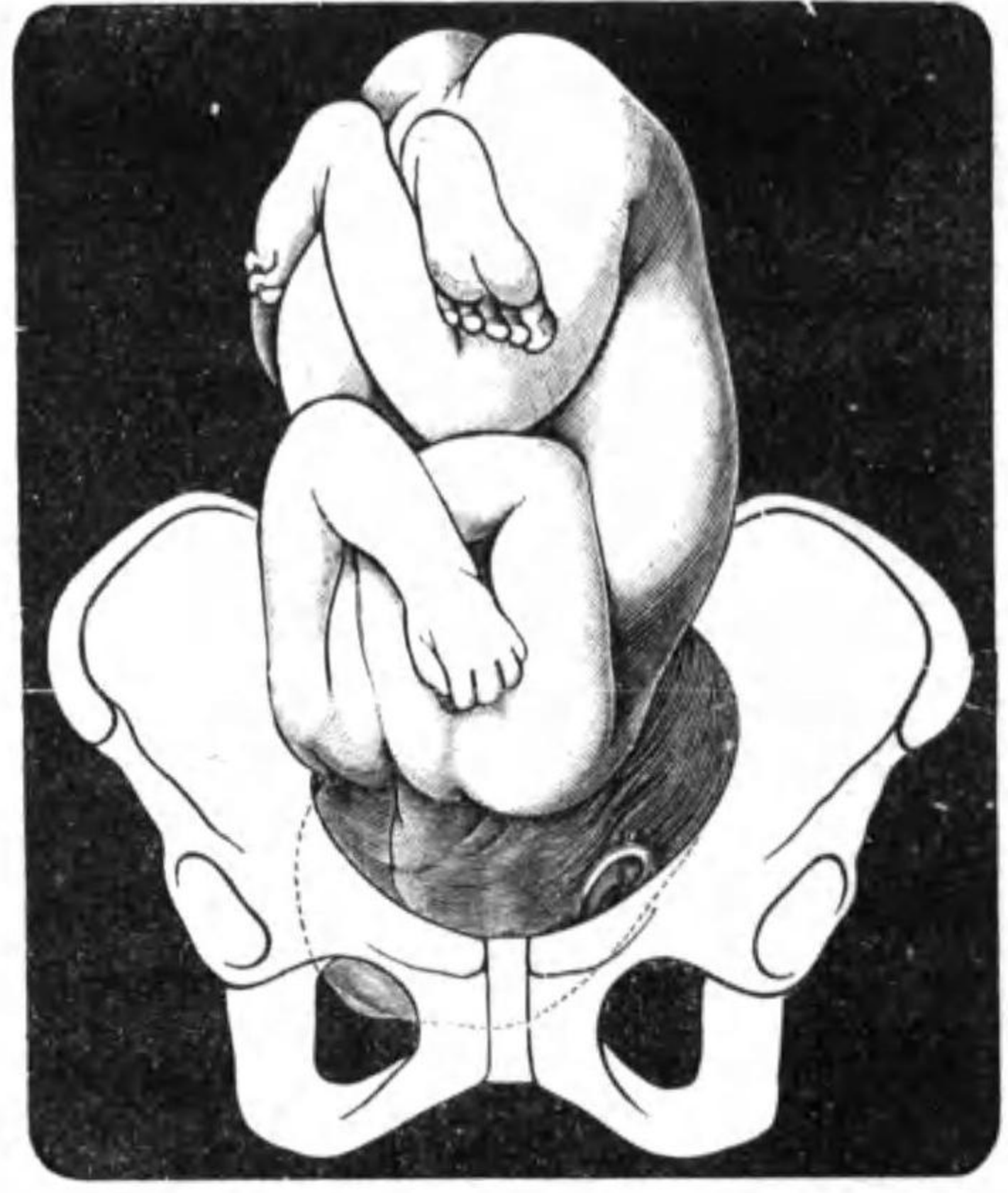
而して後頭位に於て第一體向第二體向を區別せし如く兒背が左に向へるか右に向へるかに從ひて第一顔面位、第二顔面位を區別す

第九十六節 顔面位の診断

兒頭若し第一顔面位を取る時は外診によりて次の如き所見を得べし

骨盤の上方に於て胎兒の下向部に觸るくに多少の熟練と注意を以てせば兒頭の伸展せるを認むること難からず後頭は著く左方耻骨地平枝の邊にありて兒頭と背との間に深き溝を觸る之れ兒頭の甚しく伸展せられ背部に近きたる爲に生ずるものにて背は子宮の左側に小部分は右側に觸る而して

第百十圖



顔面位の體勢を示す

子宮に於ける胎兒の各部の状態を考ふるに其胸部は背部よりも前腹壁に近くが故に第一顔面位に於ては胎兒の心音を胸部に相應して中央線よりも右側に於て

明に聴取し得べし(第一後頭位に於ては心音は左方に於て明なり)

顔面位に於ては内診に多少の困難あり之れ吾人の觸るく處の顔面容易に腫大し輕卒なる検査にては軟塊に觸るくが如くな

るにによるものなり顔面の位置を定むるには其硬部即ち突隆
せる鼻梁を求むるを宜しとす鼻梁は三角形をなせる特異の
形状と二個の鼻孔とによりて知るを得べし既に鼻孔を見出
せば他の部分を見出すことは容易なり而して鼻根よりは前
額縫合に達し其兩側に眼窩を觸れ鼻梁の兩側にして眼窩の
下には上顎を觸れ猶其下には口を觸れ静かに其内に指を入
るれば齒槽突起及び舌あり時としては吸乳運動を營む猶其
下方には下顎及頤部を觸る凡て此等の内診は小心翼々とし
て行はざるべからず是れ眼球口腔粘膜の如き軟弱なる部分
は損傷を與へ易く爲に懼るべき結果を起すことあると顔面
位に於て胎胞の存在せる間は之を破れば分娩の經過を不良
ならしむることあるが故に成るべく長時間之れを保存すべ

きを以てなり然れども顔面位の鑑定を爲すためには今述る
ところの諸部分を悉く觸知すること肝要なり譬へば若し下
顎を觸知せずして大顛門を觸るること確かなる時は顔
面位にあらずして前額位なるべきが故に其區別を明か
にする爲に必要なり
後頭位に於ては矢狀縫合の方向によりて兒頭の骨盤に於ける
位置の關係を示したるが如く顔面位に於ては顔面線(顔面長
徑)即ち前額より頤部まで引ける線によりて骨盤内に於ける
顔面の位置を定む又鼻梁が此線上を走るが故に鼻梁に重き
を置き次の如く云ひ得べし即ち鼻梁(又は顔面線)横徑線上
に在り故に顔面横徑線上に在り又顔面位にありては頤部
は常に先進するを以て其所在を明にして後頭位に於ける顛

門の如くに考ふるを便なりとす

第九十七節 第一顔面位分娩の経過

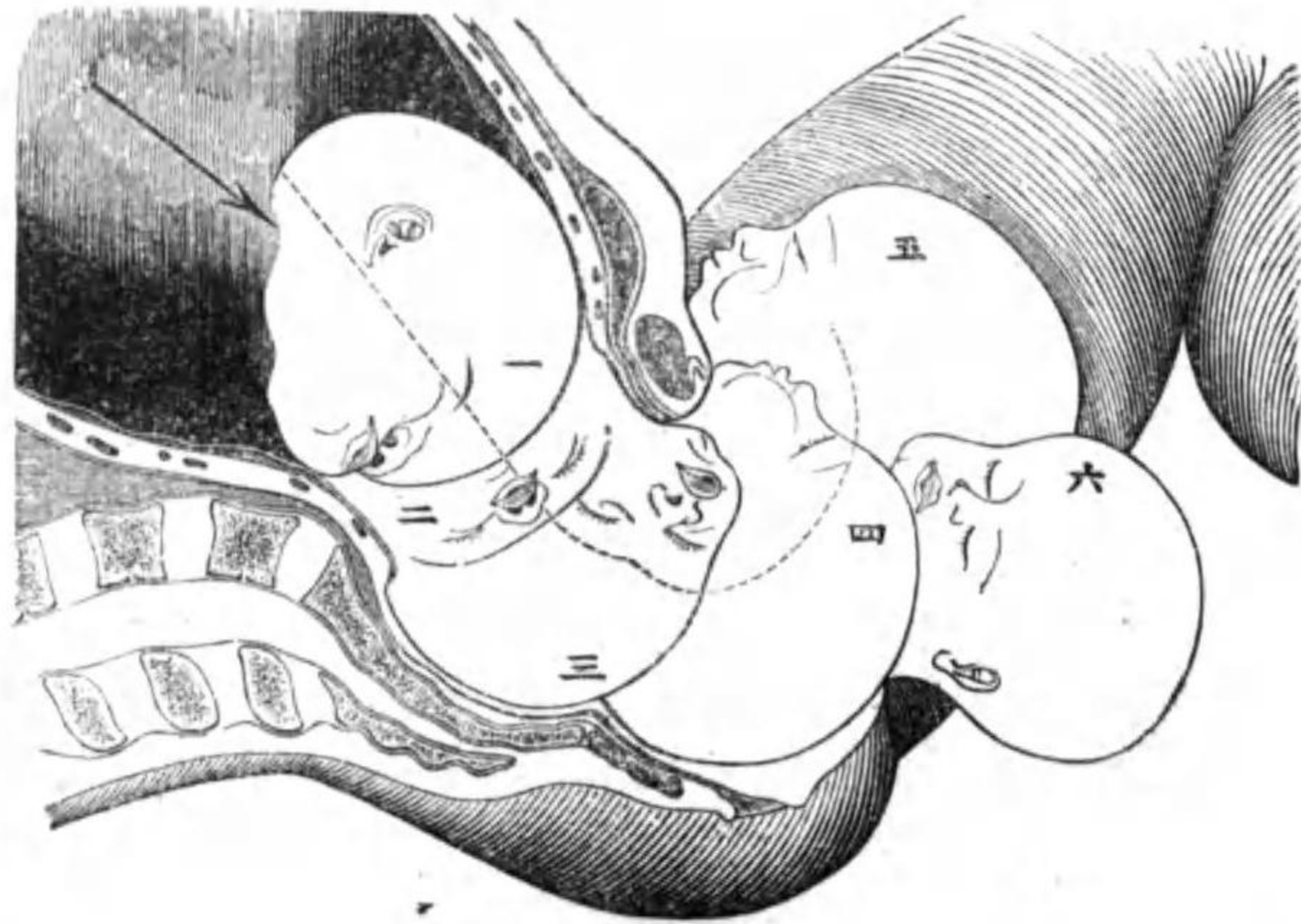
骨盤上口の上にて顔面は骨盤の横径線上にありて頤は右に前額は左に在り陣痛の作用によりて兒頭骨盤内に來る其際頤は先進して下降し同時に前方に向ひ之れによりて顔面は骨盤内に於て左斜径線(第二斜径線)を經過し然る後骨盤下口に來り顔面線は縦径線上にありて頤は右側の耻骨弓脚の下に達し初めて陰裂の間に表はれ次に口次に前額を陰裂の間に見るに至り最後に會陰は後頭の上を超えて滑脱す此時會陰は甚だしく緊張するが故に甚だ破裂し易く會陰保護には充分の注意をなすも猶裂傷を免れざるこゝ多し從

第一百一十圖



第一顔面位の分娩を下方より見たる想像圖

第一百二十圖



第一顔面位の分娩に於ける通過の態を示す(第一百十三圖) 数字は順序を示す

て兒頭の通過も亦困難にして兒頭は固有の變形(第一百十三圖)

を受け生後割合に長き時間尙此變化を認め得べし前額は低く鼻は上に向きて小さく見へ眼窩及口唇腫脹せり

産瘤は第一顔面位に於ては右口角の部に生ず
第二顔面位に於ける分娩經過は第一顔面位の經過を了解せ

圖三十百第



顔面位分
娩に起る初
て起る初
生児頭蓋
の變形を
示す

分娩の進むに従ひて額は前方に前額は後方に向ひて廻轉し骨盤腔を通過する間には顔面線は右斜徑線(即ち第一斜徑線)を通過し額は左前方前額は右後方に向ひ猶進みて骨盤下口に至りては額は左側耻骨弓脚の下に前額は薦骨陷凹面に來

ば自ら明らかなるべし即ち骨盤上口にては額は左方に前額は右に向ひ顔面線は横徑線の上在りて

る産瘤は左口角の部に生ず

顔面位に於ては分娩の困難なること多きは既に前に述べたる

が如し故に必ず醫師を招き其指圖を受くるを宜しとす

殊に顔面位に於て頤部の廻轉前方に向はずして後方に向ふ

こと恰かも後頭位の違例の場合に於て後頭が後方に廻轉す

る如くなることあり斯る場合には殆ど常に自然産をなし

得るの望なく必ず醫師の介助を要するものなり

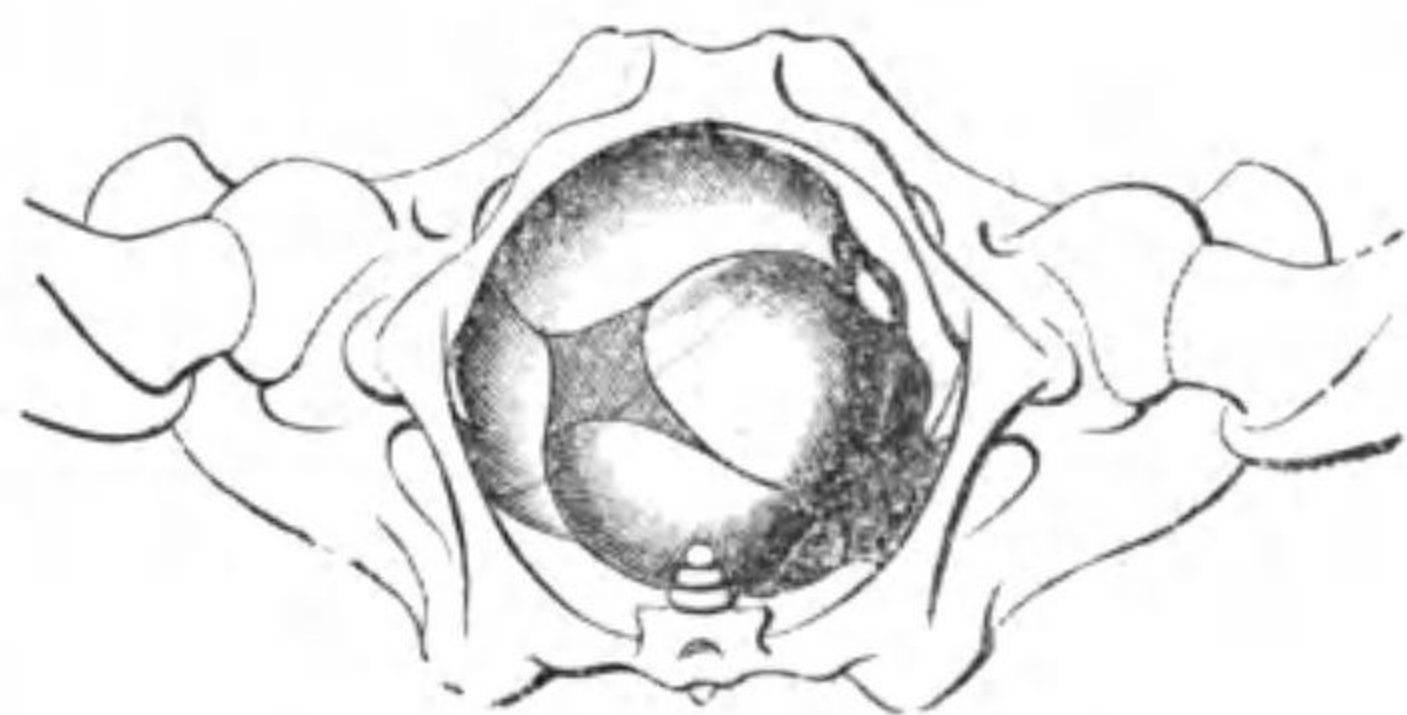
又顔面位にて生れたる嬰兒は産瘤の爲に顔面甚醜惡なること

あれば直に産婦をして之を見ることなからしむるか或はよ

く之を説明して後に示すべし

第九十八節 前額位

圖 四 十 百 第



像る見よ下婉る於位前
圖想たり方を分けに額

前額位に於ては兒頭は最大周圍を以て分娩するが故に最も不良の位置なりと雖も幸にして此位置の分娩は甚だ稀なる

はじめ前額位を以て經過するも後には屢々顔面位又は前額位となる

外診によりて知り得る處の状態は顔

面位に於けると殆ど同じきも内診

によりては口及下顎に達し能はざ

るここ及び前額殊に大顛門を觸る

骨盤上口に於ては前額縫合は横徑線

上に在るも下降の際には前額は前に顛頂部は後に向ふ陰裂

圖 五 十 百 第



前額位分
娩により
て起る初
生兒頭蓋
の變形を
示す

前額に生ず兒頭は固有の狀態を有すること此位置に於ても亦分娩甚

に於ては初めは前額次に眼現はれ然る後顛頂部は會陰を超えて出で然る後耻骨弓の下より上顎口及下顎現はる産瘤は

だ困難なるを通常とすれば醫師を招くを宜しとす

第九十九節 骨盤端位

骨盤端位を以て分娩開始せらるる時は自然の力のみによりて分娩を遂げ得べし然れども此分娩に於ては胎兒の臍部まで娩出したる後生命に關はる程大切なる場合あることあれば

第百六十圖



第一尾骶位を示す

第百節 骨盤端位の分類

を招聘すべきことを産家に告ぐべきものなり

尾骶部先進し兩下肢胸面に向ふ如き状態にて娩出する時には單純尾骶位又は單純臀位と云ひ兩下肢上方に向へども膝に於て屈曲し足部は臀部の近くに在る時は

常に醫師の援助を藉るべきものあり
即ち臍部の娩出せるより兒頭の娩出するまでの間に軀幹
或は兒頭と骨盤との間に臍帶の壓迫せらるゝ爲に臍帶の
中の血行を妨げ或は之を止むることあり若し臍帶中の血行
中止すれば直に嬰兒は呼吸運動を始むるも空気を吸入する
こと能はざれば粘液血液羊水等を氣道に吸込みて窒息に陥
るものなり嬰兒若し此状態に在ること數分ならば必ず死す
べきものなるが故に臍部迄娩出せるも尙軀幹頭部等の娩出
に時間を要するが如き場合には産科醫自ら手を下して分娩
の進行を促すべきものなり然れども此際には母子共に容易
に傷害を受くることあるものなれば熟練なる産科醫を招く
べし故に産婆若し骨盤端位分娩の診定をなせば直に産科醫

不純尾骶位又は不純臀位云ふ

兩脚上方に向ふことなく下方に向ひて延長する時は完全足位云ふ若し一脚のみ延長する時は不全足位云ふ此の場合に於ては足部最初に出るなり足位に於て膝關節曲り居る時は膝が最も先進す之を膝位と云ふ膝位にも亦完全膝位不全膝位を區別す

第一百一節 骨盤端位の診断及分娩經過

斯く骨盤端位を色々に分ちたれども外診によりては何れも同じ様な状態を見るのみ内診によりて始めて各精密に區別し得るなり

外診に依りては耻骨縫合の上方に於て不正にして硬きも頭部

に比すれば小にして柔軟なる先進部を觸知す之れ臀部なり背部は右若しくは左に在りて子宮底に大なる硬き球状のものゝを觸る之れ兒頭に於て一手より他手は恰かも水中に浮べる護謨球の如く感觸し得るものなり
臀部を探る時にも水中に於ける浮球の感あり然れども兒頭を觸るゝ時の如く著しからず之れ臀部は直に軀幹に連りて廣く附着するを以て頭部の如く動き易からざればなり
胎兒の體向によりて右若しくは左に於て大約臍の高さ又は臍より上方に聽取するものなり
内診によりて先進せる部位を定むることは困難なるものなり
此部は軟塊をなし甚しき特異なる點なし加之分娩長びく時は諸部腫脹し頭部に於るが如く産瘤を生じ鑑別し難き故に

欠

先づ骨部を求むべし即ち薦骨より尾骶骨に移り行く處の後面に於ては殆んど總ての小兒に於て陷凹ありて其陷凹せる處に尾骶骨觸れ得べし之れより上に進めば薦骨の棘狀突起の恰も珠數玉を列べたるが如くなるを觸る之によりて兒背の方向を知り得べし而して更に指を以て反對の方向に探り行けば肛門に達す肛門は生活せる小兒に在りては括約筋によりて閉鎖せらるるものにして若し其中に指頭を入れんごすれば括約筋は收縮すれども口腔の如く齒槽突起もなく舌もなく又哺乳運動をなすこともなし其兩側に坐骨結節を觸れ之を齒槽突起と誤るここあれば注意を加ふべし肛門の前に陰部あり男子なれば陰囊と陰莖とを觸れ女子なれば陰脣を觸るくも産瘤を生じたるときは確に之を認むること

第百十八圖



尾位に於ける分娩経過を示す(其二)

此時兒背が前方に向はざる時は不正なる分娩経過となる斯る場合に於て胎兒の娩出は醫師の力に依らざるべからず骨盤端位の自然産に於て胎兒の生産することは臍部の娩出は頭部の間に時間

欠

を要するところ少き時に望み得べし然れども陣痛弱く産道の抵抗強くして分娩に時を要する時は生産の望甚だ少し而して足位よりも尾骶位の方が生産の望多し何となれば尾骶位に於ては足位の時よりも大なる先進部にて産道を開張するが故に次で頭部の出る時には足位に於けるよりも廣き産道を通し且上方に曲げたる下肢によりて臍帯の壓迫を受くることを防ぎ得べきを以てなり

第百二節 骨盤端位分娩に於ける處置

骨盤端位に於ける分娩が自然産として終結する時にも醫師の介助を要するさきにも産婆のなすべき介助は會陰保護なり此位置に於ては臀部及び頭部の出る際會陰を保護すべし頭

部の娩出する時には會陰部を保護するに便なる爲に兒體を成るべく高く擡げ會陰部を充分によく見得る様にすべし骨盤端位の分娩は西洋風の臥床にては横床に於てするを便なりとす本邦普通の寢床にては其必要なし横床とは臥床の長りとす木邦普通向の産婦を臥床の上に臥させしむるには臥床の側を壁の方に向け産婦を臥床の上に臥させしむるには臥床の壁の方に向ひたる側縁に頭を向けしめ其軀幹には少しく蒲團をかひて少しく上體を高くせしめ而して臀部を床縁に近き處に置き其下に一の括り枕を當て下肢は廣げて二個の椅子に載せ猶一の椅子を醫師の爲に其間に置くべし本邦風の臥床にては只臀部の下に枕を入るくのみにて其上に護謨布又は桐油紙の如きものを布きて羊水等の流出せる時産婦の背部を潤すことなき様にするを以て足れりさせざるべか

産婆若し骨盤端位なることの診断をなさば速かに醫師を招か
 しむべし産婦は其間安靜に臥さしめ決して努責することな
 からしむ其他直腸及膀胱の空虚なるや否やを注意し産床を
 整へ消毒に必要なものゝ初生児の假死に對する處置の準
 備をなすべし若し分娩經過の有様により醫師の來診す
 る迄に胎兒既に臍部を顯はしたる時危険の兆あらば産
 婆自ら分娩を介助し胎兒を挽き出し以て胎兒の生命を
 救はざるべからず然れども此場合には母兒共に損傷を
 受け易きことゝ挽出の方法は秩序を守りて最も靜かに
 最も手早く行ふべきものなることゝを忘るべからず若
 し然らざれば小兒の生命を失ふのみならず母體にも亦

第百十九圖



尾位に於て胎兒を挽出す状態を示す

危険を來すことあり
 産婆の挽出法を試むる
 ことを得るは耻骨弓
 下に肩胛の出る時即ち
 臍部の陰裂より外に出
 たる後のみなり餘り早
 く兒體の牽引を試むべ
 からず之れが爲に屢胎
 兒の四肢が頭部の傍に
 於て上方に伸び分娩の

障害を來すことあればなり
 此法を行ふ時は常に硬き骨部に依りて胎兒を保持すべし

圖 二 十 二 百 第



矢の胎児を
矢の胎児を
矢の胎児を
矢の胎児を
矢の胎児を
矢の胎児を
矢の胎児を
矢の胎児を
矢の胎児を
矢の胎児を

手の指の延ばして陰裂内に入れ
關節に達し上膊を中指示指と
拇指にて平かにつかみ而し

て胎児の胸面に沿ひて
胎児の手を持ち圓き輪
を畫くが如く或は其顔
面を拭ふが如くに回は
して膊を解き出すべし
既に之をなすことを得
れば其出でたる膊を軀
幹と共に攪み軀幹を舊
位置に復したる後少し
く前上方に兒體を推し

戻し而して更に兒體の左肩を後方に來らしむる爲に兒背を
母體の右側に向はしむる様に廻轉すべし次に右肢にて行へ
る如くにして左の膊を解き出すべし即ち産婆の右手を以て
兒體を母體の左側股關節の方へ扛つゝ左手を腔内に挿入し
前に述べたる如くすべし若し一側の上肢のみ上昇せるとき
は此方法の何れかを行ふを以て足れりさす兩上肢解出すれ
ば兒體を産婆の左前膊の上へ騎馬せるが如くに載せ左手の
示指及中指を兒の口腔に入れ下顎の上に置き拇指を以て願
部より之を保持すべし此時に下顎と共に舌を保持すべから
ず然る後右手の示指及び中指を肉叉状に開きて兒の頭部に
後方より掛け此指にて徐々に後下方に向ひ壓しつゝ左手に
て頭を胸に向ひて引かして漸次に弓状に前上方即ち骨盤軸

の方向に従ひて挽き出すべし若し初生兒窒息の状にあるときは直に法に従ひて蘇生せしむべし

第三百三節 正規分娩と異常分娩

縦位分娩の内にも後頭位は正規分娩として取扱はれ母兒共に危険を來すこと少きも他の位置即ち前頭位顔面位前額位其他總ての骨盤端位に於ては分娩困難なること多く從て醫師の助けを要すること甚だ多きものにして體勢の異常あるものなれば之を異常分娩として取扱ひ必ず速に醫師を招き其差圖を受くべし只本編に於て之を説くは縦位なるを以て理會に便ならしめんが爲なり
又顔面位に於て頤部の後に向て廻轉せる時の如きは到底人

工産にあらざれば娩出し難し故に本編正規分娩の部に於て説く處の位置を取れる分娩にても異常の分娩は其状況を察し適當に母兒の生命の保全を謀る爲に介助をなし且必ず醫師の助けを受くべきことを忘るべからず
且つ前に述べたる如く骨盤端位の分娩に於て挽出法を行ふが如きも母兒に危険を來すの恐あるときは醫師の來診を待つ暇なき時のみ特に行ふことを許されたるものにして止むを得ざる場合の外産婆のなすべきことにあらざれば之を行ふべきには殊に謹慎して過なき様に法則に従ひて處置すべし

第四編

正規産褥の経過及褥婦並に初生兒の

取扱法

第四百節 正規産褥

分娩終れば生殖器は漸々に妊娠前と同様の状態に復するものなり此回復の爲めには通常六週間乃至八週間に要するものにして此間を産褥と云ひ産褥に在る婦人を褥婦と云ふ産褥に在る間には生殖器の回復する他に猶乳房より乳汁の分泌を始む既に妊娠中に於ても乳房より初乳と稱する稀薄にして白色なる砂糖水の如き液を搾り出し得るものなれども

分娩後には此液は帶黃白色に見え分娩後第三日乃至第四日
 の頃に至り乳房強く緊張し腫大して重くなり且其内に何物
 か充滿したるが如き感ありて乳房を壓すれば乳汁容易に流
 出す
 分娩後の數日間に於て褥婦は疾病に罹り易く又分娩の際にあ
 りたる錯誤、過失の結果は此頃に至りて始めて現はるること
 多きものなれば産婆は定むる處に従ひて褥婦を看護し疾病
 の起り來ることを防ぎ又一方には充分注意して早く疾病の
 發りたることを認め又之を處置するの機會を失はざらんこ
 とを要す故に褥婦の病あることを認むるや否や醫師を招聘
 することには義務として忘るべからず
 健康なる褥婦は自覺快適にして少しも苦痛を訴ふることなく

欠

欠

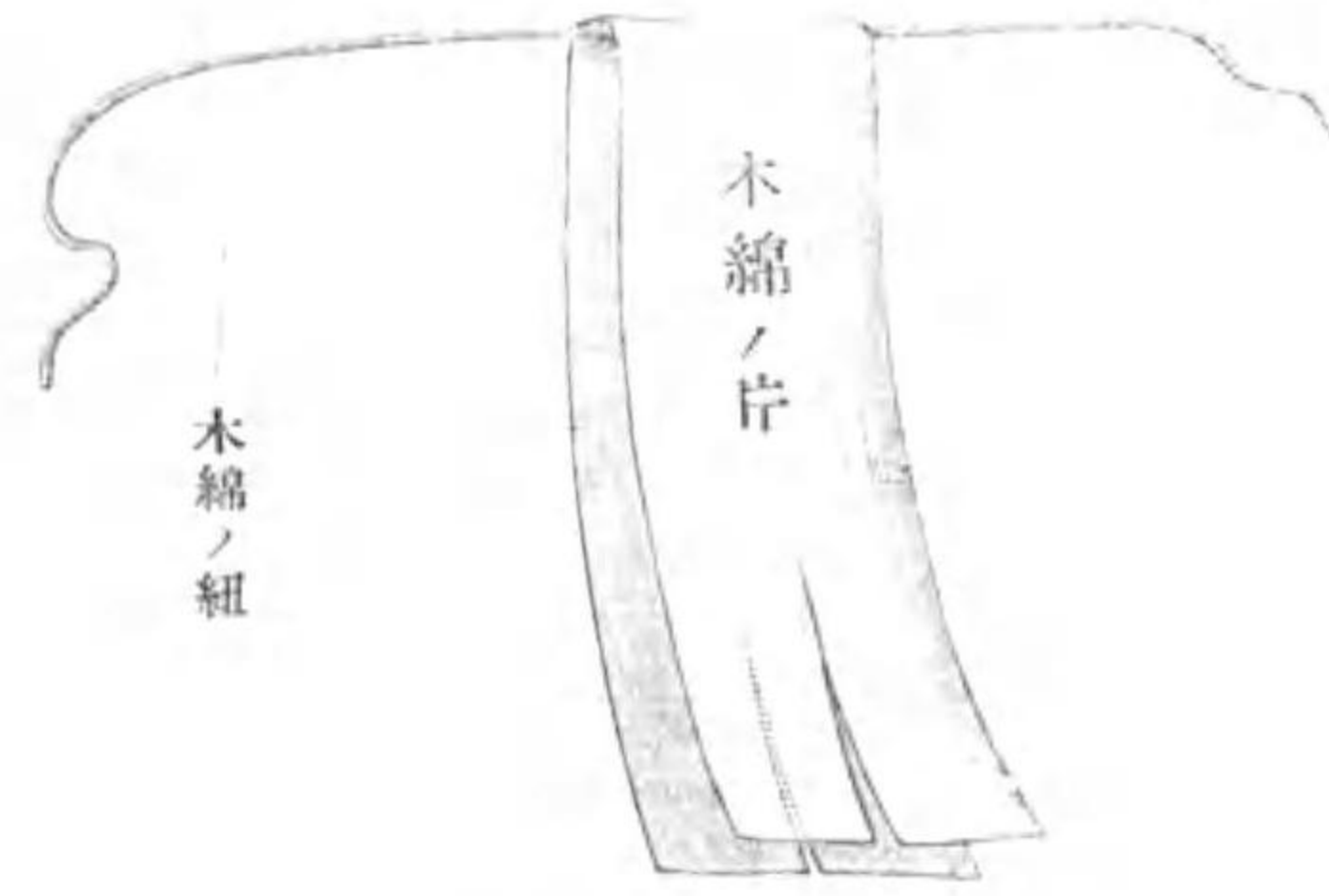
子宮の下部及膣部は緩く垂下す分娩の直後には極めて容易に全手を子宮内に挿入し得べきも日を経るに従ひて子宮収縮し子宮腔は益々狭小す又一方には子宮筋肉の大部分變化して吸収せられ萎縮す之に應じて子宮底は日々に下降し第五六日の頃には恰も臍窩と耻骨縫合との中央位にありて第九日乃至第十日頃には最早耻骨縫合の上にも觸るゝこと能はざるに至る然れども經産婦にありては初産婦よりも此變化の來ること徐々なり此收縮の甚だしき時即ち分娩後第一二日等に於て陣痛の如き痛を發す之を後陣痛と云ひ異常なるものにあらず又哺乳せしむる時に後陣痛あることあり子宮収縮と同時に子宮内より脱落膜の殘部を血液及び粘液等と共に排出す之を惡露といふ始めは血液様にして漸次肉漿

様となり次に混血粘液様次には混膿粘液様となる通常血様
悪露は二三日にして肉漿様となり五六日にして混血粘液様
となるを通常とす混膿粘液様の分泌物は其量漸次減少しつ
く尙數週間續くものなり又子宮腔部腔及外生殖器にも重要
なる變化あり分娩の時に生ぜし創傷は治癒し生殖器は縮小
し弛緩せる腔部は固くなり子宮口は閉鎖す然れども子宮は
全く舊の如く收縮せずして妊娠前に比すれば少しく大なり、
子宮口には瘢痕と裂傷の治癒せるものを残し爲に凸凹不
平となり腔は皺襞を失ひ滑澤となり弛緩す腔口も亦弛緩す、
健康なる褥婦の皮膚は在褥中多量の發汗の爲に濕潤し且柔
かなりこの汗を褥汗と云ふ

第百五節 褥婦の處置並に看護

産褥の経過を佳良ならしめんと欲せば安靜と清潔に注意
するここを要す分娩終れば外陰部に附着せる血液粘液の如
きものを丁寧に拭ひ去り尙清潔なる布片又は綿を以て洗ひ
清むべし斯くして後四角に切り殺菌したる綿蒲團又は綿紗
を壓抵布として外陰部に當て之を丁字帯にて押へ置き且腹
帯を施すべし丁字帯は木綿半幅位のもの長さ二尺餘りの布
片を二つに折り其折目に細き紐を挿み其紐にて腰部に纏ひ
其一方の端を前に取りて之を紐の間に挿むなり腹帯は後に
説くところを参照すべし而して臥床の上には新しき下敷を
布くべし

第百二十四圖



丁字帶の圖

褥婦は初五日乃至七日間は主として仰臥の位置をせらしむべし然れども子宮の收縮佳良にして悪露も亦過多ならざるごきは第二三日の頃より後は時々側臥の位置をせらしむべし之を産褥に於て子宮の舊態に復する爲に必要なり

衣服は下着と寝衣とを用ゐる寛濶なるを宜しとす夏に於ても冬に於ても被蒲團は適當に温保するを目的としなるべく輕きを宜しとす而して僅に不潔となりたるごきにも直に知り得る爲に下着又は蒲團の敷布等

は白きものを用ゐて度々取り替ゆるを宜しとす不潔なる臥床の中に居らしむる習慣は甚だしき誤ご云はざるべからず固より此等の被布下敷及び下着を替ゆる前に寒冷なる時候なれば必ず之を温むるごきを忘るべからず又臥床を交換せんとするごきは一方に用意を調へ置きて靜かに之に移すべし(下巻を参照すべし)

褥婦の在る室は空氣の流通よく夏季に於ては晴天ならば窓を明け放ち冬季に於ては隣室の窓を開くを宜しとす賊風の入るは宜しからず又明りに室内を暗黒ならしむるは宜しからず室温は攝氏二十度位なるを以て最も宜しとす其他室内の空氣を不潔にすべきごきは之を避くべし

身體を安靜にする外に猶精神の安靜も亦必要なりゆえに分娩

後八九日間は家事の指圖其他精神を勞すべきこと及び強き感動を起すべきことは之を避けしめ訪問を謝絶し褥婦を煩はさぐるを宜しとす又褥婦を甚だしく感動せしむべき談話等を慎むべし

褥婦の看護に臨み大切なる規則として遵守すべきは分娩の際に於けると同じく消毒の法則を嚴守することなり之れ産褥中に於ても亦種々の細菌によりて傳染を來し之が爲に病を起すことあるものなればなり

産婆は初週の内毎日二回少くとも一回褥婦を訪ふべし此時産婆は褥婦の健否を精密に觀察すべし而して褥婦自らの感覺如何なりや種々の疼痛はなきや大小便の通利は如何なりや等の事を褥婦に尋ぬべし

次に褥婦の體温と脈搏とを檢すべし然る後手指を充分消毒し洗水器に微温の三%の石炭酸水又は一%のリゾール水を充したる後丁字帶及前に當てたる綿を除去すべし而して之に附着せる排出物の色と量と臭氣とに注意し且丁寧に外陰部を洗滌すべし然れども醫師の命なくして濫りに腔洗滌を行ふべからず洗滌に際し産婆は創傷表面の色出血の有無浮腫の有無外陰部の腫脹の有無等に注意すべし總て使用して不潔となりたる綿布片等は燒棄べし

褥婦は其下腹の弛緩せるが爲に尿道の壓挫せられたる爲に臥位に在る爲によりて排尿し難きことあるものなれば分娩の後毎三時に尿器を與へ或は下腹に濕温奄法を施すべし若し此等の方法を行ひて利尿なき時はカテーテルを用る注

意して之を排泄せしむべし若し大便の通利なき時は二三日の後に至りて灌腸を行ひ糞便を排出せしめんことを試むべし而して後尙便秘せるときは其状況によりて毎日或は隔日に灌腸を行ふべきも成るべく自利せしむるを宜しとす便通後は常に外陰部と會陰、肛門の部を丁寧に洗ひ新しき壓抵布を外陰部に置くべし

褥婦若し後陣痛の強きを訴へ安眠を得難きが如きときは子宮の存せる下腹部に濕温奄法を施すべし若し之を行ひて輕減せざれば醫師の指圖を乞ふべし

分娩後は腹壁甚く弛緩し決して以前の如く緊張せず弛緩せる腹壁は後に至り種々の困難を惹き起すことあるものなれば分娩終れば直に麻又は木綿の布片を數枚重ねて之を下腹の

上に當て腹帶を施すべし又産褥に在る間のみならず尙其後までも木綿又はフラネルにて下腹部を巻くを宜しとす

食餌は初一二日間は主として牛乳、肉汁又は粥湯、葛湯の如き流動性のもの又は半熟の鶏卵の如きものを與ふるを宜しとす

第二日又は第三日より漸次に常食に移り粥、魚肉等より漸次消化し易き獸肉、野菜等を用ゐる第二週の始には殆んど常食を用ゐしむべし然れども成るべく消化し易きものを用ゐる下利を起し又は便秘を來し易きものなごは之を避くべし固より食物は平素の習慣に従ひて調理せしむべく且異常あるときは醫師の指圖を受くべし麥酒又は葡萄酒の如きものは飲用せる習慣あるものには第二週より後には少しく用うるを得べし

褥婦が産褥を去り得べき時期は子宮の收縮を標準として決定すべし若し子宮底を耻骨縫合の上に觸るゝ能はざるに至れば褥婦は離褥して可なりこの時期は通例分娩後第十日乃至第十四日の頃に當るものなり然れども決して粗暴なる労働等をなすことなく徐々に褥を離れしむべし若し餘り早く離褥するときは子宮下垂症又は子宮脱出症等の疾患を起す恐ありとす夏季にて佳良の天候ならば既に三週にして産室を去るも可なれども冬季に於ては四五週以上産室に在りて感冒を防ぐを宜しとす

第百六節 經産の鑑定

在褥中に諸器官全く回復するものにあらず産褥を離れて後ま

でも變化を残す之れによりて婦人が既に曾て分娩せしころあるや否やを確定し得べし
 經産婦の乳房は弛緩して下垂し下腹部も又弛緩す腹部の皮膚には二種の妊娠痕を見る其新しきものは帶青赤色を呈し舊きものは白色にして光澤あり其他陰裂は哆開し其間には往々腔の下部を見ることあり陰脣繫帶には屢痕を有し處女膜は連續せる皺襞をなさずして處々斷裂し又は數個の小なる肉様塊をなす腔腔は廣がり皺襞少く且つ粘滑にして會陰部は柔靱なり子宮腔部は圓筒状をなし子宮口は鋸齒状となり大小の痕痕を見る猶第七十七節を對照せば詳しく經産婦の状態を知ることを得べし
 分娩の後長く時を経たるものに於ては茲に述べたる如き諸徴

候を見ることが能はずして婦人が曾て分娩せしことあるや否やを鑑定すること益困難となり或は殆ど確定すること能はざるに至る若し最後の分娩の後數年を経て復た分娩することには腔並に外陰部共に硬靱となり初産と同じき経過を取るに至る然れども分娩後十日に達せざる前に於て經産なるや否やを決定すべき場合に産婆は産褥に於ける變化即ち乳汁の分泌、下腹部の弛緩、子宮の膨大、惡露、陰部に於ける新しき創傷等を見れば容易に之を定め得べし十日以上を経過したる時は其鑑定困難なること多し

第二百七節 初生兒の看護

初生兒の纖弱なる身體は全く特別なる注意を要す若し看護上

些細なる注意を缺くごきにも其爲に小兒の死亡を招くが如きことあり故に若し病を發するか或は其疑ある時は直に醫師を招くべし

第二百八節 初生兒の榮養

小兒に最も適當なる榮養物は母乳なり故に萬止むを得ざる事情なき限りは小兒の爲にも、母親の爲にも、母親自ら小兒に授乳すべきなり母親の授乳すべからざるは全身病あるか、乳嘴の造構に著しき異常あるか、乳嘴の疾病ありて哺乳せしめ難き場合なり、肺結核、脚氣、精神病、或は癩癩の如き病氣ある時は小兒に授乳せしむべからず又母親自ら疾病あり感ずるか、虚弱を感ずる時にも授乳せしむるは宜しからざるこ